

昭和五十八年四月十九日郷土研究会資料

第一二三回

史跡めぐり資料（佐倉市）

白井城跡
佐倉城跡

國立
歴史民族博物館

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第一二三回 史跡めぐり案内

と

き

四月二十九日（金）天皇誕生日

越谷駅前 午前八時 ○分集合 八時二十六分発 上り準急

集合先
コース

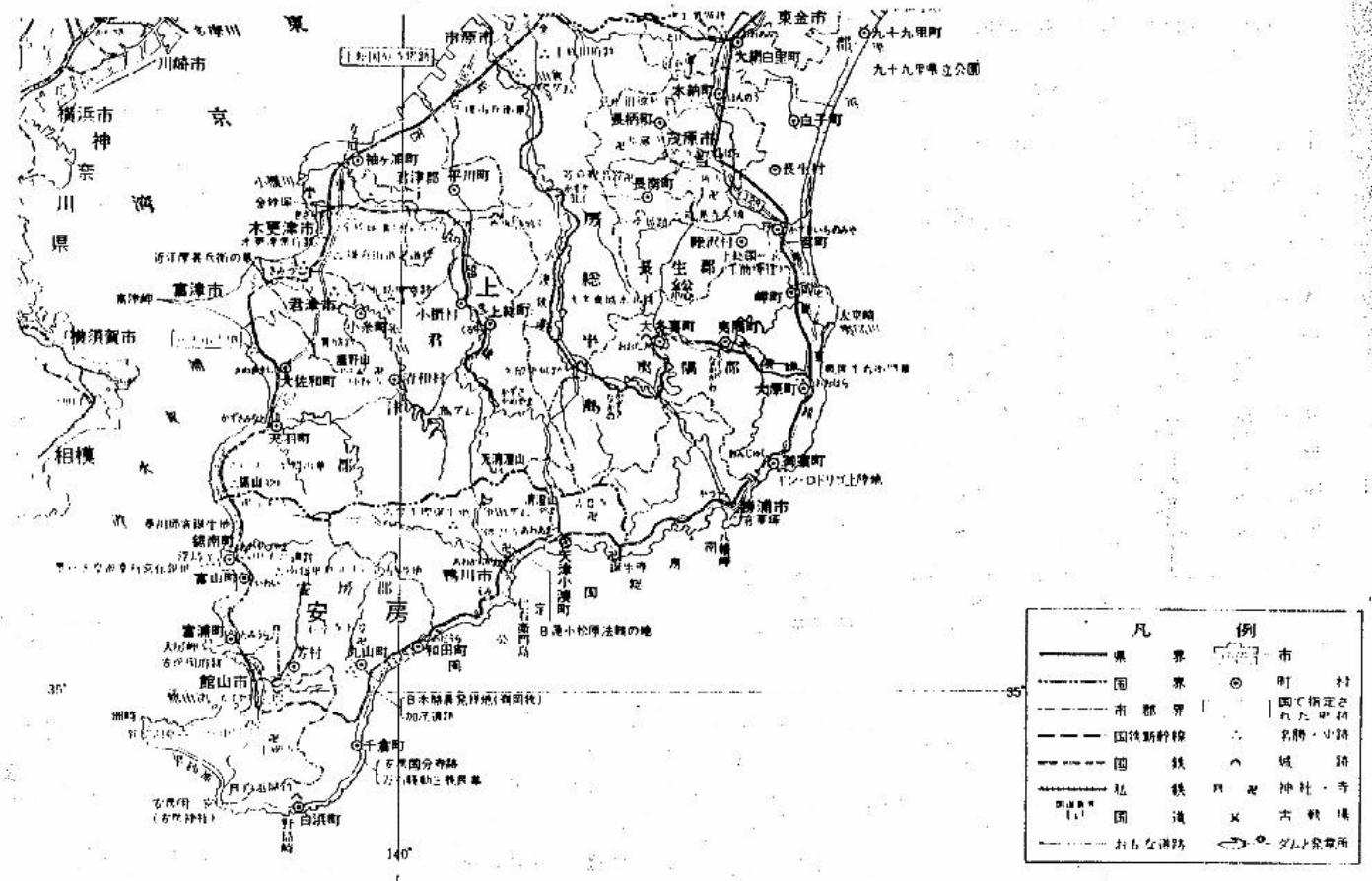
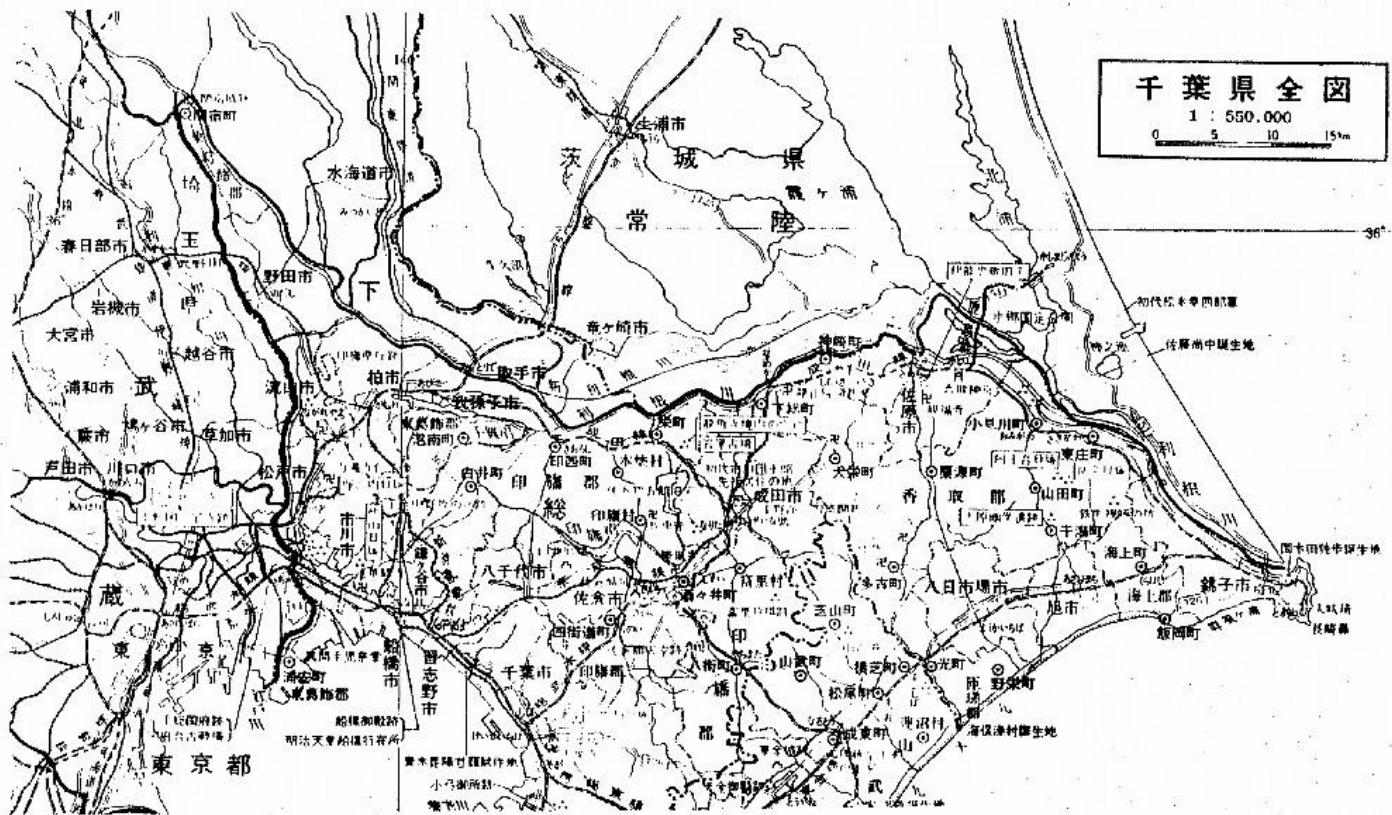
越谷駅 — 牛田乗替 — 京成関屋 — 京成臼井駅下車
臼井城跡（星神社・太田國書資忠の墓・空壕・天満宮・二の丸・本丸）
東国立歴史民族博物館 — 佐倉城跡 — 佐倉駅 — 関屋乗替

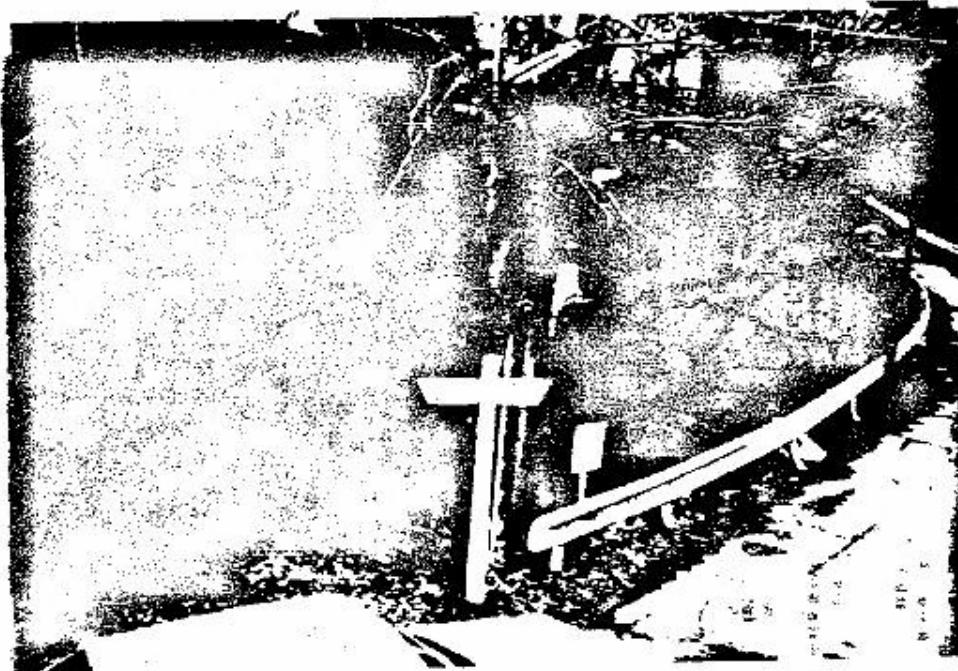
案内者 山崎善司（理事）

参加費 二千二百円也、（交通費・入場料・資料代他）
但し、昼食は各自持参の事。館内にレストラン・喫茶店有り。

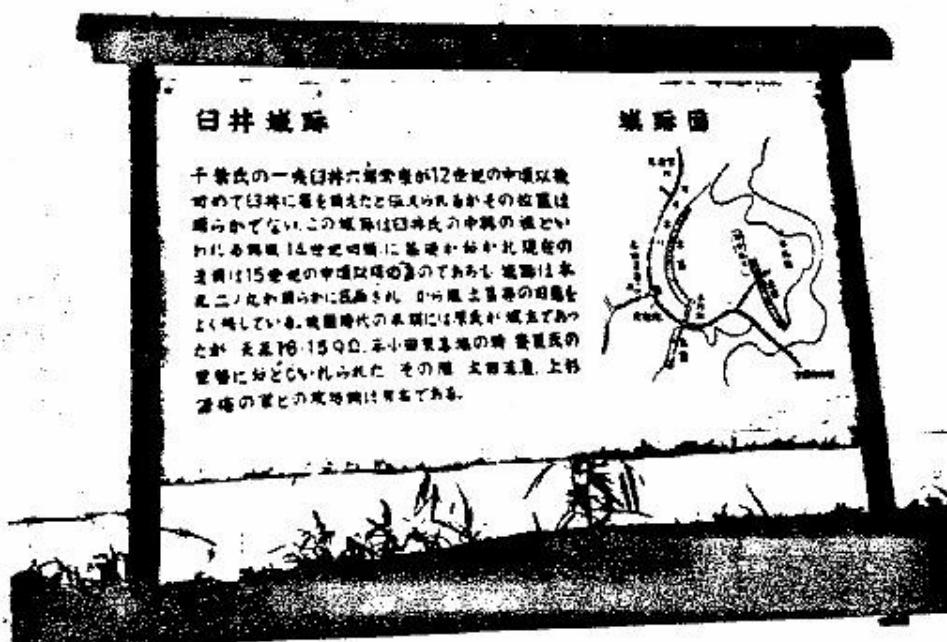
越谷市東越谷四一九一
市立図書館内

越谷市郷土研究会
TEL 651-2655





白井城内濠二の丸



白井城説明板

(その十四) 資料廿六 道灌状

一

修理大夫ニハ親侯入道副河越ニ候之處、景春令

達起⁽²⁾浅羽⁽³⁾へ打出 吉里ニ一勢相加 大石駿河守

任城地二宮へ差越 小机陣致後詰様廻課路候之處

三月十日 自河越淺羽陣へ差戻追教候間、景春者

或田御陣へ參 千葉介相談 返馬羽生署⁽⁴⁾取陣候

同十九日自小机 司名図書助ニ差副一勢 河越へ

越、翌廿日向羽主陣 倫理大夫寄馬侯之間 千葉

介 景春不及一戰令退跡 成田御陣江辺參候。方

々儀如此候之間 小机城四月十日令落居候。

相州ニも御敵城五六ヶ所候。守金子掃部助小沢城

令再興相拘候。当方分⁽⁵⁾國侯間 稲波等お司有追放

旨雖申仁候 五弓国令尋證速御迎以參度分 大石

駿河橋籠候⁽⁶⁾二宮寄陣申容候之間、腹先忠 二宮事

如此候間 相州磯部之城者令降參 小沢城者致自

落候。雖然殘党等⁽⁷⁾奥三保ニ堵⁽⁸⁾籠候之門、道灌者當

国村山与申所へ寄陣、同名図書助同大郎、自兩口

奥三保へ差遣候處 本間近江守 海老名右衛門尉

甲州住人加藤其外彼國境者共 相語 六月十四日

御方陣へ寄來候之處 於揚手図書助、握手得利、

海老名左衛門尉討據候由、夜中村山嶋へ告來候間

未明起立、同十六日越甲州境 加藤要害江差戻打

駿、為始鶴河所々令放火候之間 其盡相州東西静
謹候。

定正には父道真を翻え川越城に住わしたが、景春

は再び浅羽（東松山市）に出張つて来たので三月十

六日河越城より出兵してこれを追い散らすと、景春

は古河公方成氏の成田の陣所に逃れて千葉孝胤と居

らって、羽生に陣取り抗戦状態になつたので、道灌

はその後詰めの兵として十九日、小机の陣中より急

撃、太田図書助資忠を羽生に向わせ、川越に着き翌

廿日、羽生に向う。修理大夫定正の陣に加えた孝胤

景春等はその勢にびっくりして一戦もせず成氏の陣

所成田をさして落ちのびた。この間四月十一日には

小机城を抜き、残党は甲州武州の境、奥三保に奥つ

たので道灌は図書助資忠と同太郎を派遣して攻める

本間近江守等及び甲州勢は六月十日、戦ひ敗れて十

六日には甲州に逃入り資忠は駿河に放火して引揚げ

た相模一国はこれで鎮圧されたとしている。

成田陣所（行田市）

◎この頃より再び資忠もしくは資家は岩付城に復帰
したろう。

(その十六) 資料廿九 道灌状

千葉介孝胤御退治事 古河様へ申成、自胤為合
力向被國當方進發事好事様存候方も候歟、既都鄙
御合体之事不適幾旨、自最初孝胤者申候。無覺悟
候、殊景春許容候上、自胤為如本意錄形機修理大
夫機方有御談合 関東御無意之儀候者於以後少人
等類お不可出候間、以旁諭廻其略、十二月十日於
下總境根原令合戦 得勝利 翌年向日井城被寄陣
候。長陣之事候間、諸勢打拂難事成候之間、可被
寄々云々

御施旨度々令申候處、無其儀候之間 案而及凶事
帰國候。雖然 下總ニヘ海上備中守、上總州ニハ
上総介武田參河入道以下 背孝胤各構要害 既三
河入道者子息式部丞國ニ差置 自胤方へ令帰復、
当國へ罷越候。両國為縛如此候間、白井城下、同
國書助並中納言以下親類傍輩被官人等故輩致討死候。
此央お取合致校量候処 遙御方御徳分候。其故者、
如以前兩總州為全 古河様御刷如今者 忽者可為御
大縛候歟。

註

「 同年秋兩上杉より千葉孝胤退治を古河公方成氏の
了解を得て道灌、千葉自胤等、出兵して国府台（現

市川市）に布陣して十二月十日、境井根（柏市南方
の酒井根）にて合戦し、勝利を得て文明十一年
（一四七九）正月十八日、道灌白井城を攻めるも長
陣の為江戸へ帰る。

太田國書助資忠と自胤は縛っていたが、小勢のため
思ひようにならず、支援を乞うもこれも思ひにま
かせず、舞里谷の武田信高等を攻め、この投降者を
味方に引き入れて長期攻防戦を繰り返した。

七月十五日 資忠等陣を払って引揚げようとした時
に城兵打って出で激戦の末、資忠は城内に攻め入っ
て城を落したが、資忠等は討死したのである。

太田安房守資武状によると、討死したる資忠の弟
資家を再び道灌の養子として川越城西門の星敷内
に住わせ重臣としたと記されている。

当時道灌の実子資康未だ十才であり、道灌は四七才
當時としては己に老境に入つた為だろうか。
案この頃東武地方大乱のためか、十三備種子逆修板
牌結衆交名あるものが多く邊境されたと見受けら
れる。

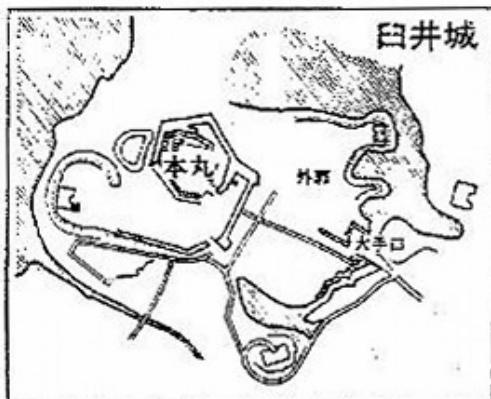
註 資忠の墓所は千葉佐倉市白井町の

白井城跡に所在

太田氏年表（岩槻城主）抄

一四六六	一四六七	一四七一	一四七二	一四七三	一四七四	一四七五	一四七六	一四七七
文正	文正	元年	二月	一日		→ 13年間	賀忠？賀家	
文明三年	文明五年	五月十三日	六月廿四日	六月廿四日	二月	二月	二月	二月
文明九年	文明八年	二月十三日	十二月九日	十二月九日	二月	二月	二月	二月
文明九年	文明八年	同 年	同 年	同 年	同 年	同 年	同 年	同 年
文明九年	文明八年	文明九年	文明九年	文明九年	文明九年	文明九年	文明九年	文明九年
三月十四日	十月末	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月
相州より豊臣氏を討つべく出兵するも多摩川増水の為 駿河不能	賀長今川氏を援けて駿河に向う 駿河より帰り江戸に還る	賀忠？ 賀家二三才	賀忠（因君助） 岩村城主に攻いは賀家が？ 古河公方足利成氏、三河攻め復帰 千葉勢の高木（民部河）吉川原で殺される。岩付との戦いか？ 同じく（左京河）吉川にて討死。岩付と戦うか？ この頃太田國書助賀忠、叔父賀長（元）の養子と成り家督を 継ぐ。 道真六三 賀長四二 賀康四 賀家二六 叔悦二三 賀忠？	太田賀長の嫡子源六郎賀康生れる 賀長三九才 道真六十才 賀家二三才 松悦二十才 上杉方の岩付六田等、一色氏の高野田宮両城攻めこれを踏む 古河落成或氏千葉軍亂の所えある。賀家二四才その元？？ 賀忠（因君助）岩村城主に攻いは賀家が？	千葉勢の原登朝入道毛利吉川にて討死、岩付と戦う？ 岩付芳林寺の位ハイに賀酒の御日とす 然るに五七才にて達在？			

一四七九		一四八〇		一四八一		一四八二		一四八三		一四八四		一四八五		一四八六		一四八七		一四八八		一四八九						
資家												文明														
七月廿六日	道灌、萬里集九	江戸城に夾まる	開く	道灌、横屋館で主君扇谷上杉定正に謀って毒殺される。五五才	父道七六才	嫡子資兼十六才	資家三九才	叔悦三六才	道灌再び叔の資家を養子と成し家督をゆずる。	道灌、江戸城を発ち北武藏に向う	下久下(熊谷市)に至り布陣	長尾景春、越生の道真と戰う	道灌、下久下より鉢形近辺を追捕して秩父に向う	叔悦降悦	法華經を自筆書写供奉す	正月廿八日	正月廿九日	十一月廿八日	十一月廿九日	正月廿九日	正月廿九日	正月廿九日	正月廿九日			
文明十八年	文明十七年	文明十六年	文明十二年	文明十一年	文明十一年	正月廿四日	三月十九日	十二月	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日	正月廿一日				
四月十八日	四月十五日	四月十三日	四月	豊嶋氏と和成る	石神井城に改む	再び石神井城を攻めこれを踏す	道灌、平塚城を攻めんとするも豊島氏足立方面に逃る	資忠を川越より羽生に援軍を差向ける(上杉定正の陣)	道灌、成氏の頼みにて千葉考胤を討つべく国府台(市川市)より境坂原(柏市)に向い合戦す。	上杉方の軍勢、臼井城を攻める	國書思資定、臼井安政が先鋒をもつて戦死す。道真六九、道灌四八、資兼九才、資家三二、叔悦二九才	道灌再び叔の資家を養子と成し家督をゆずる。	道灌、江戸城を発ち北武藏に向う	下久下(熊谷市)に至り布陣	長尾景春、越生の道真と戰う	道灌、下久下より鉢形近辺を追捕して秩父に向う	叔悦降悦	法華經を自筆書写供奉す	正月廿八日	正月廿九日	十一月廿八日	十一月廿九日	正月廿九日	正月廿九日	正月廿九日	正月廿九日



白井城 佐倉市白井

千葉常兼の第三子千葉常安は、田井に移り田井常安と称し、ここに、千葉氏の有力な支城を築いた。ときに承久三年（一一〇五）のことである。

その後、足利尊氏の配下にあった田井氏中興の祖行胤が、さらに手を加え、のち文明年間（一四六九—八六）にも、同族の原氏によつて拡張された。

五 四 分 布 图

この城をめぐる放防は、記録に残っているものだけでもかなりある。

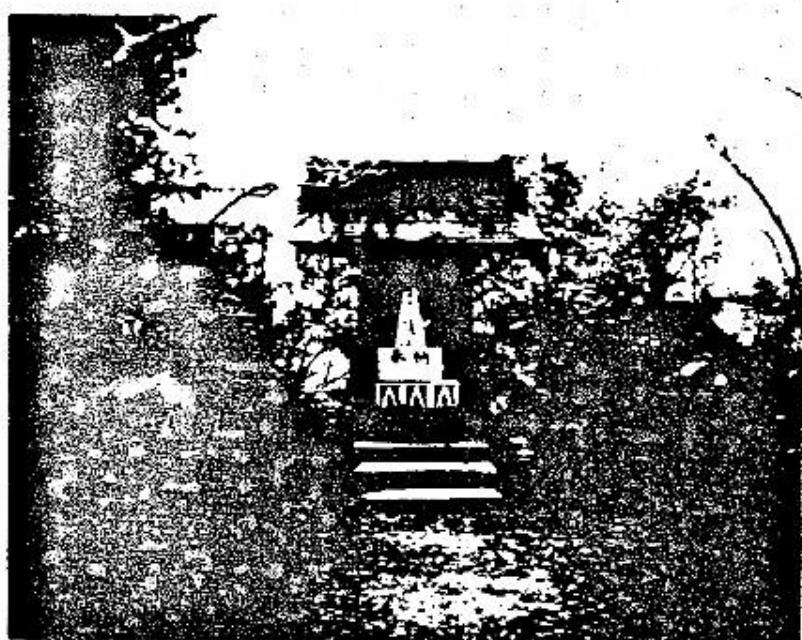
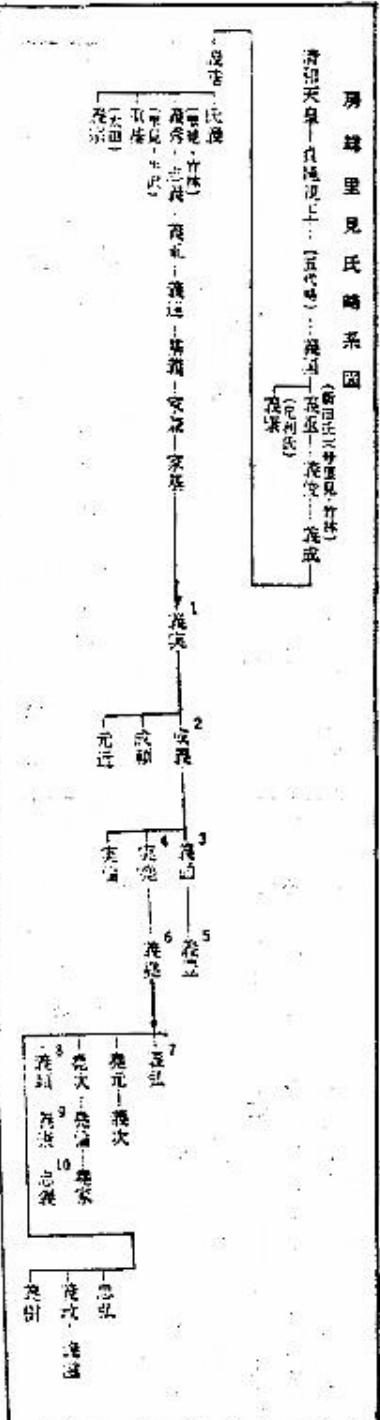
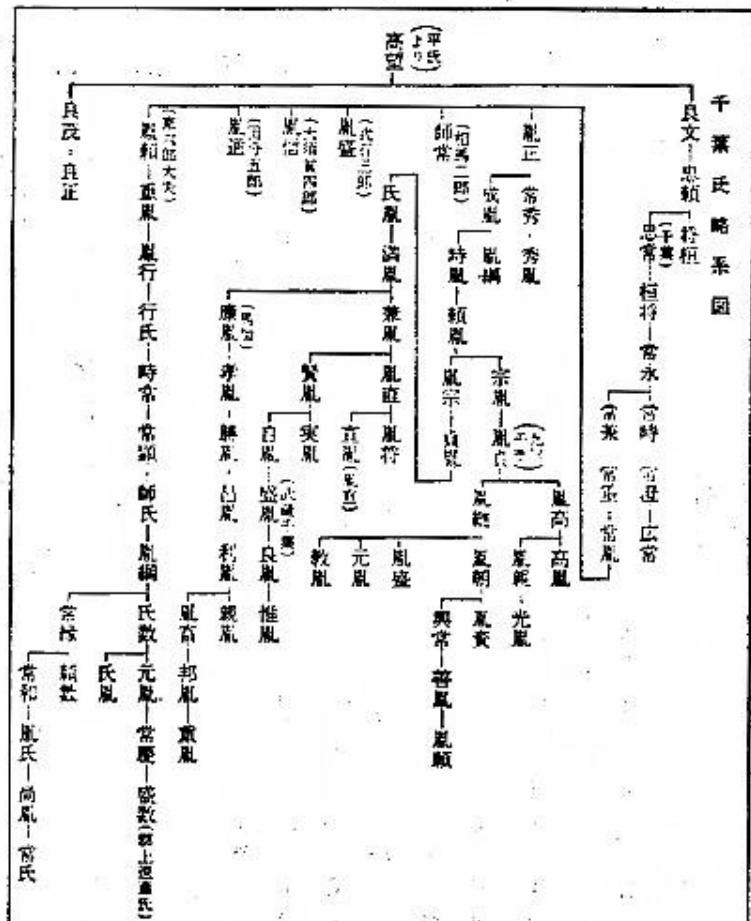
文明十一年（一四七九）正月十一日、太田道満が武藏七党を加え、「万余騎を率いて攻め寄せた『鎌倉大草紙』ほか）のをはじめ、永禄四年（一五六一）正月には黒貝の将正木大陸が七百余騎で（『里見代々記』）、同九年には上杉謙信が戦っている（『鎌倉管領九代記』ほか）。そして天正十八年（一五九〇）には、柴田秀吉の武井左衛門・財家次、本田中務大輔忠勝が小田原城といふに攻め落としている（小田原記』）。

文禄二年（一五九三）酒井家次が城主のとき、同四年正月二十一日、城中より火災をおこし、焼失、以来廃城となってしまった。

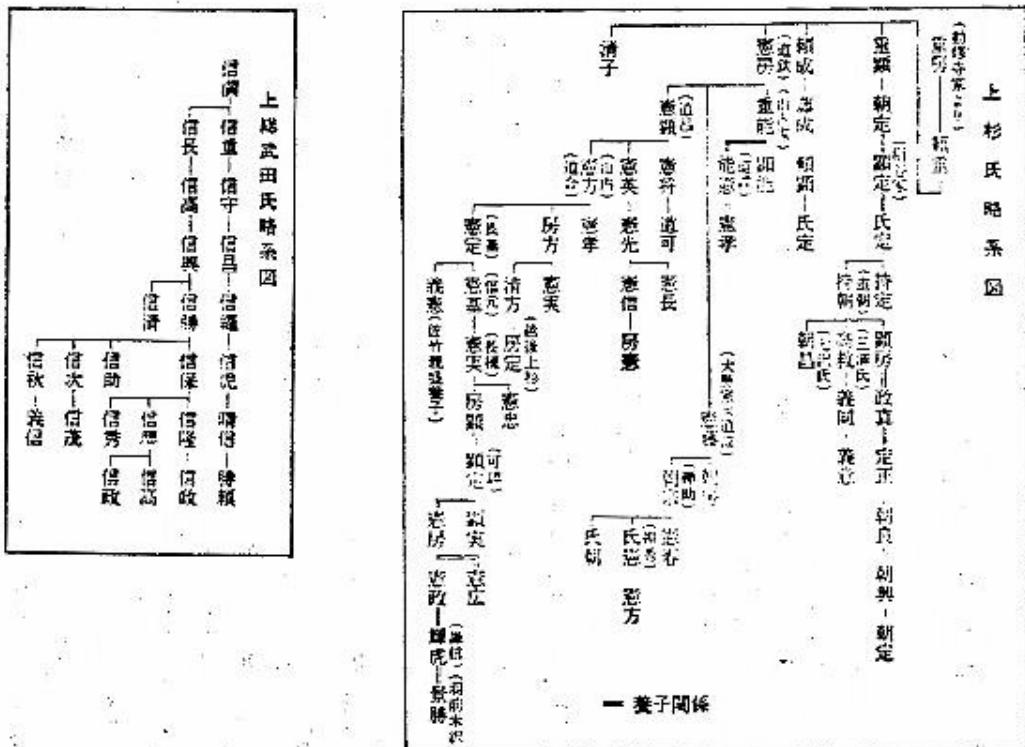
(万年
二)

現在、白井全域に遺構があるが、なかでも船戸台にある城址はもうとも新しいものである。土地の人は、いまも白井城と呼んでいい。

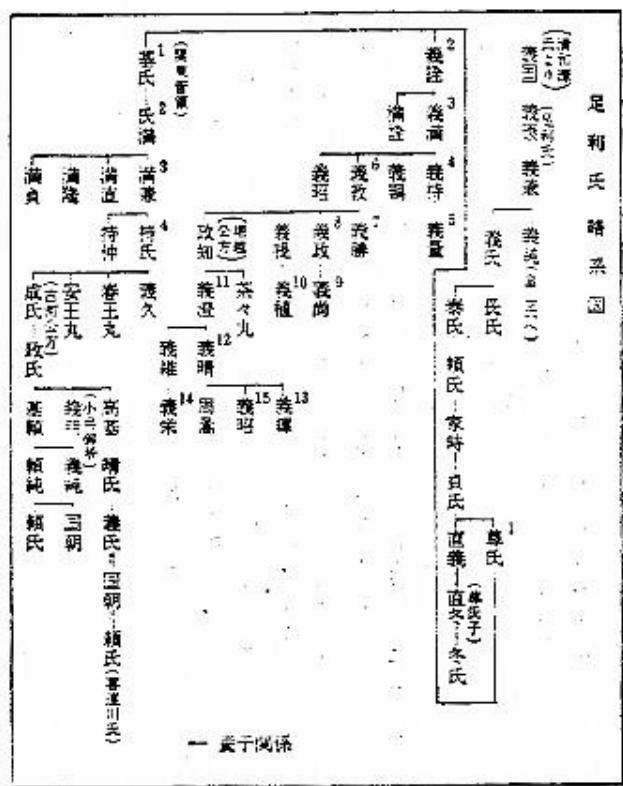
操にもみおとせとて一旦に取巻攻撃される、城中よりも突て出詫敵に戰ひけるか越後勢數十人討れければあげ貝を吹て人数を揉入る所に、城より追かけ突て出越後勢を追立切て廻る。式部大輔も是を見て城を払て突て出ければ、敵は散々に突立られはふ／＼本陣へ引返しける。螺鈴此有様を見て叶じとや思ひけん頃て人数を引て打入ける。天正十八年五月豊臣秀吉諸將に命してこれをせめしむ。式部大輔支へ拒く事叶はず遂に出で降る。十九年神祖酒井左衛門尉家次（按左衛門尉家忠日記作宮内大輔今然行賞錄）を本国に封して此城に居らしめ三万石を食む。慶長九年家次を上野高崎に改封す（加三勝二万石ヲ）』。『諸國廢城考卷之十六・白井城』



上杉氏略系圖



足利氏譜系圖



源頼朝の四天王の一人であった千葉氏の城郭は、現在の千葉市の中央にある海拔約三十メートルの猪鼻山にあって、千葉城とも猪鼻城ともいつた。

この天險の要害に居館をかまえ、周囲を土塁でかこむといった中世式の城郭で、昔はその付近は東京湾にのぞんで、西は断崖絶壁、北は都川が流れて自然の堀となっていた。東と西は台地つきで、その間に深い谷があつて空砦の役目をしている要害であった。本丸は丘の西北隅にあり、土塁でめぐらされ、周囲は五百メートルあまり、東南には空砦が構えられていた。

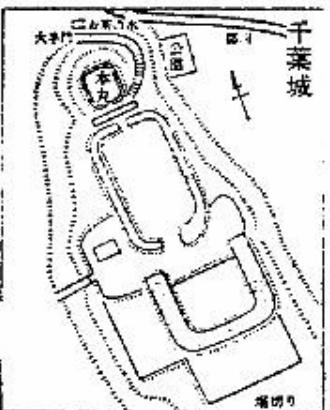
この地に城を築いた千葉氏というのは、平家の一族であるが、忠常のとき千葉を根拠地として、猪鼻山に居館をつくり、千葉氏を称した。しかし、史上に千葉氏の名跡が現われ出したのは、忠常の子常持のときで、千葉介となり、代々千葉介を名乗った。その後、館は転々としてかわり、四代目の常重のとき猪鼻山に、城を築いて移つた。時に大治元年（一一二六）六月、これが猪鼻城の始まりである。

城郭は、縱横に多くの堀をつくつてあった。大手はかなり急な坂道で石垣で組み上げてあるが、ほかは土塁で築きあげてある。陸續の跡はいまも窪地になって残っているが、曲折する大手の坂を登ると、丘陵の西北端に本丸があつたらしい。現在は小さな社があるだけだが、ここが見張所兼本丸になっていたところである。そこから南へ下るとかなり広い平坦な台地があり、当時は屋形があつたところで、見晴しが非常によい。昔は西方は東京、北と東は低地で、一キロあまりはなれたところの丘陵がわずかに見えるだけだった。現在は千葉市内が一望に見下ろせる。

さて猪鼻城が完成すると、城下には人が集まって大変にぎわつたことは、『千字集』に記されている。

これから千葉氏は武威を振るうことになったのが、全盛期は常重の子第龍のころである。治承四年（一一八〇）、伊豆に兵を挙げた

千葉城



頼朝は、敗れこの地に難伏し、各地の豪族に呼びかけを行なつた。そのとき、千葉介常胤が馳せ参じた。これがもとで房総一円の武士団はこそって頼朝に味方することになったという。現在、城址の大手門跡に「お茶の水」という旧蹟がある。

ところが、時代が流れて常胤から十代後の満胤のころになると、この千葉六党の結束も乱れはじめた。すなわち千葉公第十四代の城主満胤に四子があった。長子の兼胤には家督をゆずり、二子の康胤は常陸の大後殿へ養子にやつた。ところが康胤は、大後殿に実子が生まれたので、猪鼻城へ帰ってきた。たまたま喜張の馬加城（現在の千葉市喜張町馬加）に城主がなかつたので、満胤は所領を分配してかれを馬加城主とした。しかし、康胤は分家の冷感は不満でたまらなかつた。折あらば一旗あげてやろうと闘志を燃やしていた。

まもなく、猪鼻城は兼胤から長子の胤直に移つた。また関八州には足利成氏と上杉守頼の二大勢力が対立し一触即発の危機をほらんではいた。この中に立たされた猪鼻城はけつしてのどかではなかつた。たまたま武州分倍河原で足利成氏と上杉守頼のあいだに戰端がひらかれ、足利軍が上杉軍を破つたのを見た胤直の權臣京浪房はこのときとばかりに足利成氏の援兵と馬加康胤を結ぶにする軍勢で、猪鼻城を襲撃したのである。馬加康胤もこの機会を利用して本家を奪つ取るために、建正元年（一四五五）三月二十日の夜陰にさされ、猪

界城へ大軍押し寄せた。城兵たちは必死に抗戦した。その間に、重臣田成寺尚任は城主直直の妻子をつれて多古城へ逃がれた。また胤直、胤持ら父子も多古城へ亡命しさらに志摩城へ逃げたり、各地を拠りした末、八月十五日に一党ごとく自害して果てた。そこで宿禰を達した康胤は猪鼻城へ入り第十七代千葉介となつた。一方上杉源では実胤、白胤（胤直の側室の子で兄實胤の遺児）の二人を市川城に入れ、千葉宗家の回復を図つたが、康胤の勢力が強く機会がやつてこぬうちに千葉氏は二派に分かれてしまった。

さて、このころ足利義政は、千葉氏一族で美濃国郡上八幡城主の東下野守常縁に「康胤を追い実胤を猪鼻城主にすべし」と命じてき

た。東常縁は六代千葉公常胤の六男で、千葉六党の一人園分城主の胤頼の嫡流である。常縁はさっそく三万の兵を率いて下総の国に下り、馬加城を攻めたが落城しなかつた。そこで千葉六党の末孫たちを味方に加え、ふたたび猛攻撃を加えたから、さしも難攻不落を誇った馬加城も落ちた。このとき猪鼻城にいた康胤父子も、猪鼻城の落城も迫つたと知り天正二年十一月一日、援手から抜け出して千葉寺を通つて上総の八幡に逃がれた。しかし追手が急いで激戦の末、康胤父子は八幡を流れる藤田川の岸辺の林間で首級を擧げられてしまつた。

東常縁が美濃へ帰つたのは、それから十三年後の文明元年（一四七〇）二月であった。ところが千葉氏宗家を継いた実胤は根拠地である市川城が上杉成氏に攻められ落城したので、康胤は武州石浜城に、自亂は赤坂城に移つた。

その後の千葉介は康胤の第三子輔胤が継ぎ、猪鼻城を廃して佐倉の丹門山に居城を移し、代々千葉介を称して、相模の北条氏に属したが、天正十八年（一五九〇）七月豊臣秀吉の小田原攻めのときに滅亡して、名門千葉介は絶えた。

・（泰山哲之）

「千葉氏累世此域に居る」按九代後記以此域。源頼朝之時其先千葉介常始て本國之守護に補せられ、子孫相襲て此に居る。文明三年

足利成氏時居古 河城上杉頼定が鳥に破られ走て此城に入ル。城主千葉陸奥守康胤迎へて是を守護しける見九代。永禄中千葉介國胤相襲て是に居り北条氏に属す原記。天正十三年千葉新助都胤房總治都胤初称栗飯原久四郎按国都國調通与小田原記。其臣桑田万五郎所難國胤蓋一人也然無三比明延今各攤ニ回文

のために試せらる。其子幼稚成ニよつて此旨北条へ申けれハ氏政の不知にて、当城をま小田原より持ノ其子二歳に成とも又新介と称して当城に居住し家臣等後見して有りけるが、其年の冬証人として小田原にぞ置ける。十八年神祖諸将を遣へしてこれをせめ給ひしかハ此城遂に明退ける」。

興國元年ニハ師冬此城に曳ル。四月源頼信攻て是をやぶりしかハ師冬城を焼て逃ル」。『諸国廢城考卷之十六・千葉城』

千葉氏館

香取郡津幡町武田字笠瀬

現在は畠および山林となつてゐるが、里人は千葉殿屋敷と呼んでゐる。

千葉氏の末にあたり、胤富の長子良胤は多病であつたため、千葉氏の本拠たる佐倉城を弟邦胤に譲り、城下公津の地に隠居した。

その後小田原役ののち、邦胤の子重胤は江戸に出て客死したが、一方、良胤の子孫はなお佐倉城下に住しており、徳川氏の代となつて、孫の知胤に至つてこの地に移住したものである。

ここにおいて、千葉氏の旧臣で印旛郡宝田やその他のいたものがみなひそかに臣札を執り、佐倉城主堀田氏もまた客札をもつてかれを過したといわれている。

しかし、その後その子孫は江戸に出で、ついに歴史上から姿を消したのである。これこそ千葉氏の正統であつたらうが、徳川時代も

末期に江戸に出たものらしい。

ただし、『千葉大系図』には、胤富の子は邦胤と他に女一人となつてゐり、胤胤の名は見えない。

多古城

香取郡多古町多古区半多古台

里人呼んで城山と称する。すなわち多古の町並みの南方に廣い、高地であつていまは耕種となり、堀によって11郭に分かれているが、本丸、二の丸の跡である。その一部は東方に突出し、はるかに志摩郡に相対した跡にさうしてゐる。

この城についへば、元正年間（一四五五—五六）、千葉宗家たる室直とその子流宣が増加、原らの叛乱のため千葉城を追われ、この多古城に逃がれ（父室直は志摩城に入った）、ついにこの城も叛乱軍の陥むところとなる。千葉一族の滅亡に至った史実は有名である。しかし、それ以前のことについては、ほとんど明らかにすることができない。

流宣は、敵に多古城を攻められるや城外阿弥陀堂に脱出し、そこで自殺したといわれる（八月十二日）。介錯は田城寺直時で、遺直はわざか十五歳であった。

その後、牛尾氏が守護を修繕して居城し、威を近隣にふるいたが、山武郡飯塚城主山室氏勝（葛麻）の滅ぼすところとなつた。

『三國志伝記』に、山室氏が牛尾氏を滅ぼしたのは弘治年間（一五四四—五七）といふのが、妙光寺舎口には風神の寄進を天正五年（一五七七）と刻しているところからみて、落城は天正年間（それももちろん十八年以前）のことと思われる。

また、同区猿宮といへるまでは山林となつてゐるところをも古城址と認しているが、何へいたものが明らかでない。

小西城

山武郡大網白里町小西台

俗に城山とよばれるところである。原風定の築いたもので、その後天文七年（一五三八）の国府台合戦で小弓城が千葉一族の手に陥ると、小弓城に移つた。その留守中は、一族のものをここにおいたものと傳わる。

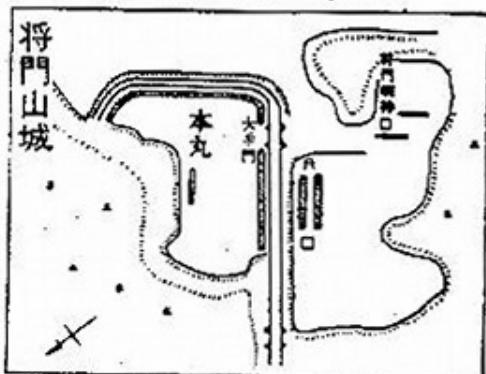
その後、弘治三年（一五五七）十月、風定は小弓を嫡子風清に譲つてみずからは田井（下總印旛郡）に移り、さらに天正三年（一五七五）もとの小西城に戻つた。すなわち、この城を退居所と考えていたのである。

将門城

日暮野宿々井町後古谷

この城は、いま墨塗の跡がある。大手門はいまの横多町のあたり、二の門、三の門は、いまの明神社の鳥居のところにあつたらしい。

承平元年平将門が陣地を構築したと伝えられ、一説には、その子（源氏の庶兄）轉龍が文明十六年（一四八四）これを築いたものといふ。



馬 加 城

千葉県立歴史博物館
『古事記』 千葉市常盤町 生糸町

この城は千葉市常盤町（北）にある高塁を備用し、治承四年（一一八〇）八月、千葉守宗の四男胤信がこの地を開拓したといい、幕張城（つちの馬加城）を築いたことに始まる。千葉常盤は幕張城に入城し、大須賀田原（おほすかたはら）「か」、生糸（いの糸）の本丸に「幕張屋形」という称がある。その他の馬加城の一郭すあるなか。

胤信は在城数年にして父千葉常胤の命により、埴生に移った。幕張は千葉改姓（正）から貞胤のあいだ、家臣たちにより守られ、いわゆる番城となっていたといふ。

その後、千葉康胤が城主となり、幕張を改めて馬加とし、みずから馬加氏と称した。

またま、関東の中心であつた鎌倉では、関東管領足利成氏が執事上杉憲忠を殺し、古河に走るという事件が起きた（鎌倉の乱）。時の大内千葉満胤の次男馬加康胤は宗家千葉家のなかで古河につく鎌倉につくかに晉見が分かれたとき、古河側（原胤房）に加わり、足利成氏の兵を借り、千葉（猪ノ鼻城）を攻め、これも落とした。千葉（宗家）胤直は千葉城を逃げ出して志摩城へ、胤直の嫡男胤直は多胡城へ入城したが、まもなく自殺し、宗家は滅びた。その後、康胤はみずから宗家である千葉家を継ぎ、その本拠を馬加城（現在の門山（佐倉市本佐倉））に移した。

時の将軍足利義政はこの馬加康胤の行動を聞いて大いに憤慨し、千葉一族である美濃郡上の城主東常綱に千葉胤直の甥実胤を助けさせ、康胤討伐の命を下した。東常綱は浜春利とともに東下し、千葉一族の固分、大須賀、相馬らの兵を合せて康正元年（一四五五）夏五月、千葉（馬加）康胤の連合軍をこの馬加城に攻め、討ち敗つた。

翌二年、康胤はまた康正と上杉の連合軍と上総八幡に敗つたが敗れ、ついで野望に満ちた康胤の生涯は終わり、これに伴つて幕張城の運命となつた。

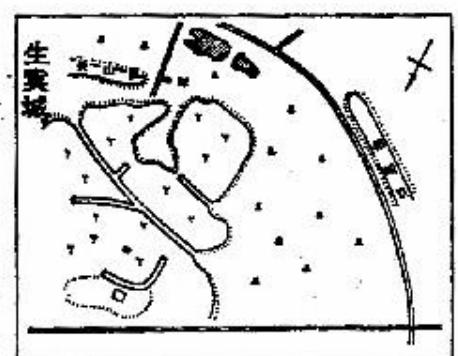
生 実 城

千葉市生実町北生実

千葉市の南方、生実にあるこの城は、千葉常長の曾孫にあたる原胤達の城であった。大治年間（一一二六—三一）、常途は下総、上総の領地を与えられ、当城に居城することとなりたのである。

その後、常途に子なく、かれの死後この城が廢されたものか、あるいは千葉一族が住まつたか定かでない。その後、応永年間（一三四九—一四二七）に千葉兼胤の弟胤高が入城し、原四郎と名乗り、城を修築して代々子孫が居城した。

この四郎の死後は長子甲斐守親胤、さらに親胤の三男胤平と居城、原胤平が小金城に移ったのち、かれの祖父である原胤經が宝徳三年（一四五二）小弓城（生実城）主となり、小林城より移つて入城した。胤經の子行朝（友幸）の代になると、後の上総守源氏の真理谷城主武田（真里谷）三河守信保（豊三）とたひたび領地を争い、当初は行朝軍が優勢であった。しかし真理谷氏は古河公方足利高基の弟義明を迎へ、さらに安房の里見氏をはじめ多くの土豪を味方とした。大永七年（一五二七）大仁小弓城を攻めた。要害不落を陥った小弓城もついに落城し、城主行朝は敗傷のため死亡した。



小弓城を奪つた足利義明は、

当城をかれの居城とし「小弓御所」と称した。さらに義明は里見、真里谷氏などに西隣を侵略させ、安房、上総の地を手中に收め、公方として関東に号令せんと、古河公方と対立するにいた。

たいた。当時義明の嫡子は義明の野心を危ぶみ、ときの英主北条氏綱に小豆御所（生実城）の征討に向かわせた。義明は氏綱の率いる北条勢を國府台に迎えた。

いわゆる國府台の合戦である。この合戦で義明の軍は敗れ、かれは戦死してしまったのである。

勝ちに乘じた北条勢は、安房、上総軍を追撃し、上総の半ばまで手中に収めて、生実城は再び千葉氏の所領となつた。

天文七年（一五三八）、さきの城主原胤定（當時小西城主）が再び置かれた。胤定十九年間居城ののち、弘治三年（一五五七）、嫡男胤清に当城を譲り、自分は田井城から、さらに天正三年（一五七三）小西城へと移つた。小西城は源清の子胤栄の代にいたり、天正三年田井城に移り、家臣を当城へおき、番城とした。

この頃になると、原氏は家家千葉氏を凌ぐほどの勢力となつてゐた。北条氏が天正十八年、豊臣秀吉の攻撃を受けたとき、原胤成を兵一万騎を小田原に差し向けていた。しかしこの城も紫原の手勢に攻められ落城している。

その後、關八州を与えた家康が江戸城に入城し、寛永年間森川重俊が一万石をもって生実に封せられた。

森川重俊は生実城の一部に居館を築き、代々明治維新になるまで住まつた。

北条氏が天正十八年、豊臣秀吉の攻撃を受けたとき、原胤成を兵一万騎を小田原に差し向けていた。しかしこの城も紫原の手勢に攻められ落城している。

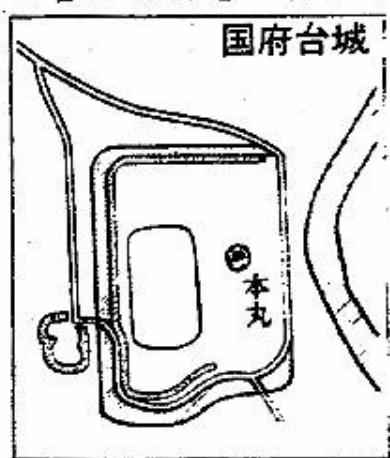
その後、關八州を与えた家康が江戸城に入城し、寛永年間森川重俊が一万石をもって生実に封せられた。

森川重俊は生実城の一部に居館を築き、代々明治維新になるまで住まつた。

国府台城 松江市国府台

氏が二つに分かれ、千葉吉胤は石浜城に、千葉孝胤は一族の田井俊胤の守る田井城に籠つて争ったとき、太田道灌は自胤に味方して田井城を攻めるためここに出城を築いたといわれる。その後も國府台城をめぐって叛乱はつづいたが、なかでも天文七年（一五三八）と永禄七年（一五六四）の二度だわたり、この台上で戦われた里見・北条の激戦は、もうとも有名である。

天文七年十月安房の一角より興った里見義堯、小豆御所の足利は義明と弟基朝を嫌して、房總軍七千騎を率いて國府台に陣し、城塞を築いた。これに對して古河公方と足利晴氏を率いた小田原の北条氏綱と子の氏廉は、三万余騎を率いて江戸川を渡り、國府台の北方、松戸の相模台に進出した。この報を受け、義明は相模吉田に軽進し、激闘の末、弟の頼基とともに討死した。この合戦から二十六年たった永禄七年（一五六四）正月、里見義堯の子義弘は、兵八千をもつてふたたび國府台に出陣した。これに對して北条氏廉、氏政父子は、二万余騎で江戸川河畔に迫つた。このとき義弘は前回の苦い経験から松戸の渡しの守備を固め、一部の軍勢を國府台の南方の眞間の丘の麓に配置して北条勢をさせ、攻撃してきたら、退却して丘上より反撃しようという作戦に出た。北条勢はこの策略にひつかつて、先鋒部隊は全滅した。里見勢はこの大勝に気がかるみ、その夜は國府台上の館で酒宴を開いた。そのすきをついて北条の一隊は、松戸付近から渡河して國府台の背後を回り、眞間の森に伏せ、翌朝どつと國府台に攻め込んだ。あわてた里見勢は大混乱、たゞまち三千人が戦死し、義弘はやっと安房に逃がれたが、これから里見



氏は衰え、上総、下総の両国は北条氏の勢力下に入った。いま城址は里見公園となり空堀、鐘掛松などの旧跡がある。(泰山哲也)

「文明十一年太田道灌曰井城をせめし時、此城を築いて二れ」と

一文明十一年太田道灌曰井城をせめし時此城を築いてこれに焚く。其後小弓の御所義明威勢広大に成て関東と対抗し、精鋭軍を

美置関東之長者と成へ、こと企^{くわ}けるよし聞ければ、古河殿より北

条氏稱を門々たの三ありて義明を対治有るへきと也。氏綱既に打立と聞へけれハ義明ハ急キ中途に馳せ向て防げと、舍弟義頼と小弓の御曹司を先鋒之不疑として里見義弘を副將軍にさため、房州西端之軍兵を催し当城に備後市川を前にあててそ待懸ケたり。去程に氏綱ハ天文六年十月小田原を打立其勢二万余騎にて当城に赴向ふ。敵味方互に進ミ出打つ討れつたかひけるに、義明遂に横井新介のために射られて死けれハ残る兵とも皆小弓へと爆りけ
る。」

博物館展示埴輪



特民・成氏と其の妻

京都の源氏は源秀の乱には持氏を支持したが、これは義朝が源氏にくわわっていること、また源秀の勢力の台頭をおそれたからで、亂後は義持と源氏との対立がよきまつた。

正慶二年（一二四九）九月、永享と改元したのに、持氏は新しい年号をもういらず、反幕府の姿勢を露骨にあらわした。好学の教養人として知られる吉領上杉憲実は、持氏の反幕府的な行動にたいして、たびたび諫止し、わざわざを未然に防ごうとしたが、持氏は聞きいれなかつた。永承十年（一二四三八）持氏の嫡子實王丸の元服に際して、これまで将軍から「諱」の一字を冠わる先例があつたのを無視し、源氏の諱止をもきかず、範囲の社前で勝手に式をおこない、義久と命名した。源実は病と称して出仕せず、源実の家宰長尾入道芳伝や島谷上杉持朝、千葉介吉の崩廃は両者のあいだのとりなしをはかつたが、持氏は開きいれず、かえつて源実を殺そうとしたりで、源実は危機を感じて本郷上野の白井城に帰つた。

(一四九二) 四月、結城城は落城し、古河城の野田氏は船
にのって安堵なくし、関宿城も降参した。道子安王・春
秀・主は捕えられ、京都に領送中、美濃^{織井}で將軍義教の命
により斬られ、末子永寿王も捕えられた。このとき初発
音した大嘗の風氣で、義教が赤松^{源輔}方に殺されたので、永寿
王は効命されて芦原綱川^{持之}のものとなつた。

源氏は三日間もかからなかったので、皆懶むに至ら力だけでは同家落合を試験するのがむずかしい状態になった。室永七年(1246年)上杉氏一族をはじめ、常陸佐竹・下総千葉・下野小山など関東の諸将は水辱王を鎌倉に起えさせた。このうち上杉景勝(のち義義)は承認して、一回りの水辱王を関東に下向させた。水辱王は十一月元服し、上皇の一宇をあたえられて成氏と称した。當時には老練の末子忠惠が採用された。里見・千葉・武田らの諸氏も鎌倉に派出したが、関東の諸將にはこのような保守的性質を必要とする外因気があった。

よくおもわなくなり、上杉氏に对抗する結城・千葉・里見などの豪族たちの勢力をちかづけてわが周辺をかためようとした。これにたいして山内上杉の家宰長尾景仲と藤谷上杉の家宰太田資清とは、宝暦二年（一四五〇）四月成氏の鎌倉の第をおそった。成氏は江の島にのがれ、戦況いかんでは海上から房総方面へ逃避する鎌勢であったしかし鎌倉方面では千葉堀村らの軍が長尾・太田の連合軍を痛撃したので和議が成立し、八月成氏は鎌倉に帰つた。

成氏は、成長するにつれて亡父猪氏の墓所をおまい。靈天をうらみ、ひいては上杉氏一族にたいしてもこころ躍進は、特氏にたいして憲美との和睦をすすめ、奏効したがこえだが、越後守督ゆる旗標があつて不成功におわり、尾江は特氏にみきりをつけて下總に守り、市川に歸して憲美的側に投じた。特氏はこゝに幕府と対立しているうちに、力と積むべきわが周辺を敵にまわすはるにおもいった。人望を失った特氏にたいして、憲美之心したて三河守高が説を急襲し、持削・尾江もはげしく攻めたので、特氏は永享十一年（1488年）二月鎌倉の永安寺で自殺し、鎌倉府はこゝに滅亡した。

頼みに、源安主は關東公方の主大名を自任し、關東の
諸侯に済安者をくだした。見足利元・大友宗麟を守・
宇都宮景綱・小山広朝ら鎌倉府の再興を頼う諸侯が、結
城氏の行為に共鳴して桔梗城に越つた。また下総吉原城
には野坂右馬助氏行が、關宿城には下河内一統が越つて
了朝に交じた。

（前略）此處の一記は實事実狀をもつて、其の後は實事の眞偽を以て（後略）

南總の戦国大名里見氏

千葉胤直の死と東常縁

千葉氏一族の家々はしだいに独立するようになり、本宗である千葉介の権威が弱んでいったが、それでも千葉介は家々の勢力の均衡の上にたち、その伝統的權威を保つことにつとめて活動をつづけた。

千葉介胤直の老臣原越後守胤房と円城寺下野守尚任との二人は、千葉氏内部の実力者でたがいに勢力を争った。原は古河公方成氏を、円城寺は西上杉氏を、それぞれブクとしてともに胤直を東方に引き入れようと策動した。いつのまにか下越上の世情が千葉氏にもあらわれ、実指は重臣に移り、胤直は実力のとぼしい主君に転落しつつあった。はじめ乱世は源貞最後の公方持氏を支持していくが、木暮の乱にはそむいて上杉氏にぞくし、鎌倉府を

滅ぼさせる有力なメンバーであった。ところが、持氏の遺子成氏が関東の主となると、これに憤慨した。そして原・円城寺の対抗で内紛が激しくなると、こんどは胤直は成氏にそむいて西上杉氏の側にくみし、円城寺を支持することになった。

主馬加賀胤直は胤直の叔父で、古河公方を支持していた。胤直は胤直の動向をみてこれを諒ほじ、千葉介をわが子に継承させようと望み、原胤房をたすけて兵をあげた。慶正元年（享元四年八月十五日）三月、胤房の兵が千葉城をおそつた。胤直とその子胤宣はもろくも敗れて千田庄（香取郡多古町）にのがれ、胤直は志摩城に、胤宣は多胡城に逃れた。しかし胤房は志摩城を、胤直は多胡城を攻め、八月西城はおち、胤宣は自害し、胤直は土浦の如来堂（多古町寺作東寺内）にはいり、弟胤茂とともに自殺した。胤直は胤直にかわって千葉介となつたが、上杉氏は胤直の弟千葉の子実胤（じきいん）を立たつけ、市川城（市川市御前宮）をあたえて千葉氏を再興させた。こうしてこれから以後の千葉氏は、古河公方と上杉氏の勢力を背負い、二度にわかれて争うことになり、ますます衰弱におもむいた。後退する千葉氏にかわって房總に台頭した新勢力は、安房の里見氏と上総の武田氏である。

千葉六党の一たる東氏は、承久の変のとき、常陸の流風行が功を立てて吉田郡上郡山田莊を賜わり、子孫が美濃を本郷とした。時代のなかからは二条派の歌人がでたが、東宮種（1351—1394）は古今伝授でとくに名高い。常縁は京師に住んでいたが、下総における千葉氏宗家の紛争を耳にして心を痛め、将軍義政より御教書を賜わり、法式學少輔をともに下総の東莊に下向した。このとき常縁は、東庄鎌倉守東大神（香取郡東庄町宮本、東大神社）に詣でて、詔書を獻じた。

静かなる 世にまた立ちや かへらなん 神と君とのめぐみつきせず

(香取郡多古町)

東

常

縁

（香取郡多古町）

大

東

庄

（香取郡多古町）

東

宮

本

東

大

神

（香取郡多古町）

東

大

神

を詠んだ。ところがこの歌が機縁となり、妙橋は押領した山田莊を常継に返還した。常継は文明元年（一四六九）廿二月下総をあとにして京都にむどり、五月には美濃の知納城（岐阜市）で妙橋にあい、郡上郡の所領を受けとった。

古河・上杉の確執

下総についた常継は、さっそく国分・大須賀・相馬の諸氏をはじめ下總國中の兵を動員し、康正元年（一四五五）十一月馬加坡を攻撃した。康胤・胤房らは敗れて千九百方面に退却した。常継の軍は上総の諸城をも制圧し、^{シテ}浜春剣を東金城（京都市）に駐留させ、市川城の千葉介・実胤・自胤足弟をたすけて康胤を追いつめたので、翌康正二年十一月、康胤は上総八幡（市原市八幡町）で敗死した。いっぽう古河公方成氏は、篠田氏らの兵をもつて市川城を攻撃させ、康正二年正月に城をおとした。そこで実胤は武蔵石浜城（京都市東山区）に移って武蔵千葉介となり、自胤は赤坂城（京都市東山区）に拠った。実胤は寛正三年（一四六一）ころに出家して美濃國に退廻したので、自胤が千葉介を空守した。

常継が下総や新潟でいるうちに、京都では応仁の亂がおこり、応仁二年（一四六八）九月、常継の所領美濃國郡上郡山田莊と猪籠城とは、山名持澄（西園）の部将である美濃守義代吉謙（よしみち）にいはわれた。東莊にいてはるかにこれを聞いた常継は、無念に想ひ、心機をいめて改

里見・武田西氏の勃興

戦国時代の房総で大名にまで成長し、勢威をふるったのは里見氏である。里見氏の祖先は清和源氏新田氏流だといわれる。上野國新田莊を開いて新田氏の祖となつた新田義重の子義俊は、上野國碓氷郡里見郷に住んで里見と称した。これが里見氏の祖である。

義俊の後裔家基は、祖父のときから常陸國小原（西茨城郡大原村）に住んで関東公方持氏につかえ、結城合戦には持氏の遺子安王らを奉じて結城氏朝とともに壇城した。嘉吉元年（一四四一）四月、結城は落城して家基は討死したが、嫡子義実はのがれて相模國三浦におち、三浦氏の援助をえて東京湾を船で安房國に渡り、房州白浜（安房郡白浜町）の野島崎に着いた。これから房総里見氏の活動がはじまたといふのが、「里見代々記」などの里見氏関係軍記に書かれている通説である。

しかし、大野太平氏が指揮したようだ、三浦氏の本宗である三浦介時高は、鎌倉を攻めて持氏を滅ぼした室町將軍側の武将であり、持氏を支持した里見家基とは敵対關係にあるので、義実が敵地三浦へ逃げてその援助を頼むということは筋が通らないことになる。

一延命寺里見系図によると、家基が鎌倉をおちるとき、義実は母とともに常陸國にねり、時宗の僧侶に養育されたが、成長して嘉吉元年相模國三浦にひそんでいた。その後水寿王が成氏と号して鎌倉の主となつたので、義実は鎌倉にてて成氏につかえた。その後の義実は安房郡白浜に渡海し、長田に堀の内を構えて住んだという。

こうして里見氏の房州への渡来については諸説があるが、いずれも確証がなく謎にまぎれている。房州半島の先端部という地理的条件からいって、落武者のかくれ場所としてはよさわしい。また川名登氏が指揮するように、伊豆から海上を安房へ渡り、そこから出發して幕府を開いた源頼朝の故郷にならない。里見氏が頼朝にあやかつて、その祖先が安房に渡米したとの所伝を、後世になつてつくったところとも考えられる。

安房国では、長狭郡の東条氏、朝夷郡の丸氏、安房郡の神余氏、平郡の安西氏の四豪族が分立していたが、応永末年ころ、神余氏の家臣山下定兼が主の景良を弑し、安房郡を山下郡と改称した。これをみた安西・丸の両氏は協力して定兼を討つたが、その後両氏は反目するようになつた。安西景春のもとに身をよせていた里見義実は、これを利用し、まず安西氏をたすけて丸氏を滅ぼし、ついで安西氏をも勝山にやより、最後には東条氏を金山城（鴻川市打瀬）にやどりて、文安二年（一四五五）安房一国を平定したという。このような動きは、「房総里見誌」「里見九代記」などの里見氏関係の軍記にみえるのみで、良質の史料がのこっていない。「房総里見誌」は安房神社祠官岡島成邦の著で、成邦の序文によると、江戸中期の宝曆十二年（一七六二）の作である。

義実の居城は、大野太平氏によると、白浜（安房郡白浜町青木）、千田（鹿児島市西千田）の二城がそれで、その子成義のときにいたり、船村（那珂郡船村）、宮本（那珂郡宮田町）の二城をきずき、宮本城に成義が、船村城には成義の子義通がいたといふ

当月の日付を記すと、當月には、永正五年（一五〇八）九月

に社殿を造営したときの棟札がある。その墨書きによると、大棟札は「副師源義通」で、『折る所は今上皇帝千秋万歳』云々と天皇の万歳を祈り、また「源祠臣政氏武運長久」とて古河公方政氏の武運をも祈っている。こうして里見氏には祖先以来、鎌倉に進出して関東を制圧せんとの夢があり、それが里見氏歴代の目標であつて、越ヶ谷八幡は鎌倉の鍋島八幡に模したものであつた。

「鎌倉大嘗紙」には上総武田氏の活動が伝えられている。

享徳三年（一四五四）上杉景忠は公方成氏に殺されたが、景忠をおそつた成氏側の武将の中に、上総の武田右馬助信長・安房の里見民部少輔義実・下総の結城中務大輔成朝らをあげている。また康正元年（一四五五）十二月、山内上杉房謙のいる武藏・西城に対し、成氏軍の武田信長・里見義実・篠田出羽守らがこれを攻めおとしている。翌二年正月成氏が市川城を攻めたときに、これに乗じて武田信長は上総を押領し、房南・真里谷・阿波をきずいた。里見義実もこれと呼応して上総の国境を侵略した。房南城（長生郡長南庄中城）には信長が、真里谷城（木更津市真里谷）にはその子信高がいた。

信長の父、甲斐の守護武田信満は上杉謙秀の乱で神秀側にくみしたため、応永二十四年（一四四七）二月持氏に攻められ、甲斐国・郡留郡木賊山で自殺した。信長は京都に移り舟運叢教につかえ、結城合戦に参加し、千葉胤直とともに結城攻撃に活動した。宝徳元年（一四四九）成氏が鎌倉の主となつたとき、信長は近習になりつかえ、里見義実らとともに転戦して功を立て、上総國中を押領して上杉氏に抗した。その娘は里見義実に嫁したといわれ、義実とは親しい関係にあったといふ。

こうして房総の勢力団には著しい変化がおこり、北総の千葉氏は後退し、半島中部の武田氏、南房総の里見氏が新興勢力として登場する。

文明三年（一四七一）三月、古河公方成氏は、相州箱根山をこえて伊豆に侵入した。成氏に対抗させるために京

都では、将軍義政が弟政知を開東に向させ、長禄元年

（一四五七）以来伊豆畠越に居らしめ、これを畠越公方と

称したが、成氏はこれをたおそうとしたのである。しかし成氏の軍は、政知を応援した山内上杉頼定の派遣軍に

やぶれてあえなく古河に逃げ帰った。ついで是尾景信の大軍が古河城を攻めおとすと、成氏は下總にのがれ、千葉孝胤にかくまわれた。文明三年六月のことである。そ

のころの千葉介は荒廃した千葉城をはなれ、墨城を佐倉（蔚門山）に移していたという。また下總に在留した成氏の居館は、岩堀角次郎氏によると香取郡多古町御所台であったという。

このころ香取大綱宣家に差しだした孝胤の神領知行安

堵状の日付に『享徳二十年（文明三年）八月二十七日』

とあり、また同じく大綱宣家に宛てて成氏が折衝の岩原

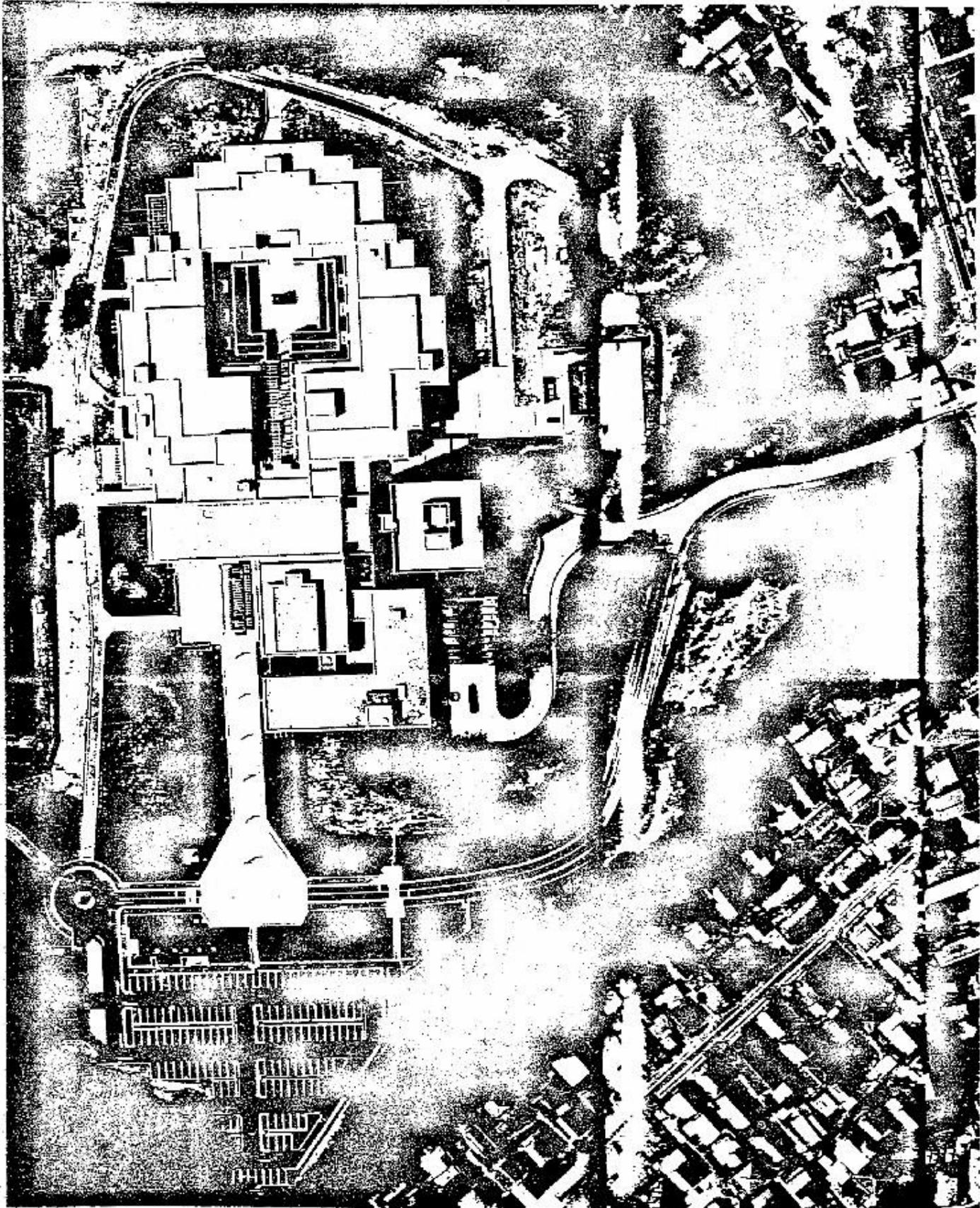
到来をつけた内書には、『享徳十七年（延喜二年）正月十六日』の日付が記されていて、わずか三年で改元されている享徳の旧年号を使用し、反幕府の態度を明らかにしている。

古河公方成氏のもとに結果した房総の諸将は、安房の里見義実、上總吉野谷城主武田信玄の北男信興（信興）、その弟房南城主道信（道信）、それに下総の結城氏、千葉

一族、関宿城主源田氏らの面々で、那須・佐々木らの諸氏もくわつて上杉氏にあたつた。文明四年三月、ふたたび勢力を盛りかえた成氏は古河城の主となつた。

道灌の千葉孝胤攻め

文明十年正月、関宿城主源田政信は、成氏・西上杉とのあいだの和睦をとりもどり、ほぼ和睦は実現した。しかし、成氏を支持する孝胤としては、西上杉の援助の下に、孝胤と対抗している武藏の千葉自胤が、西上杉と成氏との握手により、条件を有利にすることをおそれで和睦に反対した。西上杉氏の家宰太田清廉は、成氏の承諾をえたうえで孝胤攻撃の兵をだし、下總国府台（高川市）に陣を構えた。孝胤は道灌と飯沼原（松戸市小金）で戰い、原・木内らが討死し、白井城（佐倉市白井）に敗退した。翌十一年正月、道灌の弟太田資忠・千葉自胤の兵は白井城を攻めたが落城しなかつた。そこで自胤は兵を上総に移して房南・吉野谷兩城を攻め、七月西上杉氏は降参した。このとき飯沼原（猪子市）の海上防風も降伏した。いっぽう白井城も陥落したが、この城いで登忠は討死した。自胤はほぼ同縁をおきて武藏石浜に居つたが、その後孝胤は佐倉より出撃して白井城を回復した。



新嘉坡市
新嘉坡市

佐倉市

昭和二十九年三月市制施行、人口約九万一千人、面積一〇二・二六㎢、総武本線佐倉駅・京成電鉄佐倉・大佐倉・

白井。志津の各駅がある。

県の北部に位置する田園都市。東は印旛酒々井。八街の両町、南は千葉市と印旛郡四街道町、西は八千代市に各々接し、北は印旛沼に面している。昭和二十九年三月、旧佐倉町を中心、白井町・志津村・和田村・根郷村・弥富村が合併して市制を施行、佐倉市となつた。

市域は概ね平坦で、海拔三十~四十㍍の丘陵。台地が広く分布し、ほぼ中央を北へ流れて印旛沼に注ぐ鹿島川と、その支流の高崎川の沿岸には、沖積低地が開けている。北部の、鹿島・高崎両川合流点北東の平らな台地面に、佐倉の中心市街が形成されている。

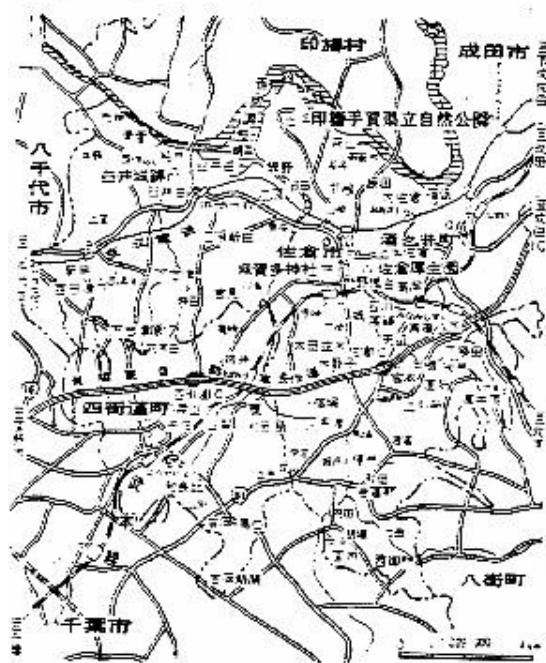
市の開発の歴史は古く、縄文後期の江原台貝塚や、各所から出土する石器・土器などの遺物が、それを物語つてい

る工場が増えている。又、市域内を総武本線・や京成電鉄、国道五十一号線・東関東自動車道が走つて交通に恵まれていて、千葉市や東京のベットタウンとして、住宅都市化の傾向が強まつていて、

農業は、鹿島川流域での稲作、台地面での落花生栽培・メロン・花木栽培などが中心で、酪農・養豚・養鶏も盛んである。県営の種畜場もある。

見所としては、佐倉城跡・白井城跡や佐倉厚生園・麻賀多神社・甚大寺・勝胤寺、県指定民族資料の鹿面(獣子面)室町期作を持つ羽鳥の甲賀神社などがあり、昭和五十八年三月新たに佐倉城跡二の丸国立歴史民族博物館が開設された。

▼佐倉市・四街道町全図



江戸幕府の

関東支配における佐倉

お腰もの支配

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役の勝利によって徳川氏の勢力が確定するが、当然その支配体制にもそれまでとは異なるものが打ち出された。すなわち、それまで万石以上の所領をもちながら、公称の大名の資格をもたなかつた徳川一門・上層階級がいっせいに独立の大名となつた。さらに万石以下の譜代家臣のなかから加封されて独立の大名になるものもあり、これらがいわゆる徳川一門（現藩・譜代大名として、統一的封邊権力に上昇した徳川氏を支える柱となつた（藤野家氏の研究参照）。

ところで徳川氏の支配領域が全国に広がつたこの段階では、江戸の周縁に配置された強力な大名の多くは、新しい事態に対応して、関東領圏以外の地に転封された（房総の大名配置は一五四〇～一五五〇年の表参照）。

はじめに慶長三年現在の大名が関ヶ原の役後どのような処置をうけたであろうか。上総の場合をみよう。内藤政長（佐貫）・岡部長盛（山崎）の岡氏は旧のままであるが、本多忠勝（大多喜・伊勢桑名一〇万石）・石川康通（甲斐一美濃大垣五万石）・大須賀忠政（久留里・遠江韮須賀六万石）はそれびれ転封となつた。このうち石川・大須賀両氏は加増封である。ところで、これら各氏の転封のあとは久留里に十萬石直を配置した。また大多喜には本

▼ 佐倉城跡（二の丸跡）



多忠朝（田舎守）・本多忠勝の次男、のち大坂夏の陣（元和元年）に於て戦死^{シテマサ}を配置した。忠朝は新規取立によつて独立^{シテマサ}の譜代大名となつた一人である。また表には示さなかつたが、万石以下の大久保忠佐（西原五〇〇石）は駿河沼津二万石（慶長七年までの加封取立）に、また山口重改（上総内五〇〇石）は常陸千久一万石（慶長七年までの加封取立）の大名に取り立てられた。

下總の場合、關ヶ原の役後の処置はどうであつたろうか。まず松平廣元（駿府）・酒井家次（日井）・音羽定義（伊豆）・北条氏勝（若狭）・成瀬正成（駿府）の五氏は田のまへし、武田氏（駿府）忠政・陸奥岩城一〇万石（慶長七）・や（駿）石原境、忠政の父の元毛は關ヶ原の役において歿死^{シテマサ}、小笠原秀政（古河→信濃駿田五万石）・保科正光（多古→信濃駿田五万石）・三浦重成（下総の内→近江の内一万石）・武田信吉（佐倉→常陸水戸一五万石）・松平（駿府）氏（小見川→三河遠江一万石）・結城秀康（結城→越前福井六七万石）の七氏を増封封した。このうち関東内に止りまつたのは、徳川一門の武田信吉（常陸水戸一五万石）のみで、他はすべて關東外に配置された。

これら各氏の転封のあとでは、佐倉に徳川一門の松平忠輝（古河に松平康長、小見川に土井利勝、兩總の内に青山忠成が配置された。また、表には示さなかつたが、万石以下の松平定勝（小國五〇〇石）は遠江掛川三万石に、本多康俊（小國五〇〇石）は三河西尾二万石の大名に取り立てられた。両氏はともに慶長七年までの加封取立である。なお、成瀬正成（駿府）は、まず天正十八年下總栗原にて四〇〇石あたえられ、慶長五年甲斐にて二万石、さらに三河にて一万石あたえられ、譜代大名となつたものである。

こうして徳川氏は、全國をまとめあげる支配体制を着々とすすめ、ゆるぎない強固なものといたをすいていった。慶長八年（一六〇三）には、家康は宿望の将軍宣下をうけ、江戸に幕府を開いた。

房總三国は江戸のお膝もとであるため、配置された大名はすべて譜代大名であった。大名の配置表によつて知られるところ、二万石の小大名が多く、最大の藩は、江戸時代を通じて佐倉藩であった。ついで古河・関宿藩があつた（初期の大名書「本多忠勝」をのぞく）。安房はもともと里見氏の勢力下にあり、慶長十九年里見忠義が伯耆国倉吉（鳥取郡）にうづきれたにあたり、幕府の威令がナミナミモヤ（敷情）^{シテマサ}、要所要所には譜代小藩が配置された。里見氏にひいては、前述のとおり、小田原篠原後秀吉から綱をうつす、上総地方の勢力扶植地を没収され、安房一国にひいてあられた。表によると里見氏は慶長三年九万石、慶長七年現在一一二万石の所（關ヶ原の役後の譜功行賞による、老練の笠置（川崎）に付せられたもの）である。里見義康の子忠義（駿府）は、大久保忠勝の孫女を妻とした。たまたま慶長十九年忠義が死となり、忠義の娘坐し、伯者國倉吉にうつされた。しかしかれには嗣子がなく、ついに家は断絶した。里見氏の末路はまことにあわであるが、形式的な理由をたねに幕府からいがなりをつけられ、ついに取潰し策のわなにおとされたのが真相であろう。

佐倉藩における大名配属の整理

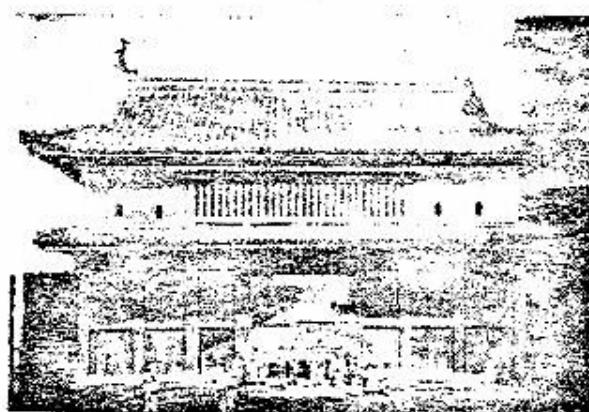
番号	六名	名	正封期間	右西
1	三浦義	久	天正18~	10,000石
2	武田(松平)信	吉	文永元~慶長7	40,000
3	松平(越後)忠	輝	慶長7~~5	50,000
	輝	通	~3~~12	
4	小笠原吉	次	~12~~14	23,000
5	主井利	善	~15~寛永10	32,400~142,000
6	石川忠	達	寛永10~~11	70,000
7	松平(形容)家信一	義信	~12~~17	40,000~36,000
	義信	頼	~17~~19	
8	堀田正	盛一正吉	~19~万治3	110,000
	基	頼	万治3~寛文元	
9	松平(大給)乘	入	寛文元~延宝6	60,000
10	大久保忠	朝	延宝6~貞享3	83,000~93,000
11	戸田忠	昌一志真	貞享3~元禄14	61,000~67,800
12	福榮正	往一正知	元禄14~享保8	102,000
13	松平(大給)東	色一義信	享保8~延享3	60,000
14	堀田正	亮一正尚	延享3~幕末	100,000~110,000

こうまでいぢり、頭をひく大名の配置のあつたことは、江戸時代を通じて最大の謎であるといふに違ひはない。

お名前をうながすはうれしい限り、天王十一年の御年
の賀葉降神におこし、三鼎鑿入が一門石をあつて
わらひへん御しおりなまめ。この後御用一門であ

10 紙引地図(用意地図)、会計明細(会計地図)、取扱手帳(取扱地図)等が生じる。即ち、用意地図は、用意するところの地図である。取扱地図は、取扱するところの地図である。取扱手帳は、取扱するところの手帳である。

(森野保氏による)



佐倉報道手門 佐倉西宮(松町)にあったもので今は無い。明治4、5年ごろの撮影(菅谷義政氏提供)。

小説「日暮里の女」(1篇)
著者：吉田千賀子
発行年：昭和26年
出版社：新星社
定価：150円

「アーヴィング」は大略の説明で、三節の
脚本をもつて、アーヴィングの實業の運営に
關するもの。

「うそだ。」指せ大名の貴賤をうなづいて、三浦・陽成・御置をひきだす。アーヴィングの貴賤をうなづいて、御置をひきだす。

通志卷一百一十五

四三〇

西子ノ島根縣御前川の入港口に御平野町御前川の河口は
御前川 - BILPEK (C 900) 口 (令制 460) 1140 m² の面積
面積十七坪ある。御前川の河口渠堰が設けられており、水の深さ十
九里。北陸御田口頭を廻る運河に合流する入港口。一萬石を積む船
舶をもたる乗船の出港口である。

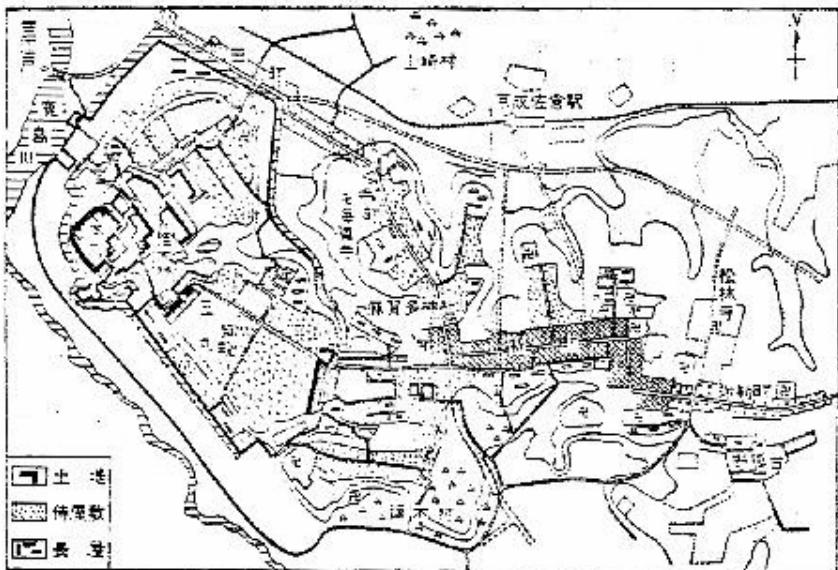
正體は、三重のうひの詩序西へひがつと新參の詩序看

正壽は、三河の守護大内義興より新家の増兵を請ひ、
あり、三代伊賀家光の側江原の在郷頭をへて、寛
永五年にはじめ、大名に取られ、二代徳秀がおの
死んだ寛永九年以降、同姓の松平信綱・河野元
秋・三浦正次らといふと幕政に奉仕した。正壽がその

おなじあつたのは、竟き十五の慶安四年にひさうの御後一九
年間であるといふ。

の事に随分心配した。下り用車（ドライブ）の助手席の腰枕の着脱の構造を改めて、腰枕の位置を腰より奥に設置して腰枕にかかる力が腰にかかるのではなく、腰枕自体が腰にかかる形態に変更された。そして車内空間の狭さが問題となってしまった。そこで、腰枕の形状を「L」型（L字型）とし、腰枕部の形状を「L」字型の腰枕部と背もたれ部の間に隙間を設けた。これが「腰枕の腰もたれ」ということである。腰枕部の腰を支える機能を忠実に負担するために腰用の専用の腰枕の開発と併せて、それが腰枕に対する年齢層を広げて腰枕の窮屈感を和らげたのがこの「腰枕の腰もたれ」なのである。同時に腰枕形状が変更された。たしかに腰枕の腰もたれが出現するだたる結果が存在したことは間違いない（参考：「腰枕の腰もたれ」）。

堀田家はその後正前系の堀田氏にかわって、正俊の弟正俊（分知）^{（一五〇九）}が頭角をあらわし、五代将軍・高吉の政治のはじまりた天和三年（一二六八）から貞享元年（一三一四）まで大老の職にあった。しかし貞享元年八月、正俊は若干齋福慶正休に殺された。正俊の後継者は子孫たる直承されだが、かれの突然の死によって正俊系の堀田氏は事実上の中絶がらしきに至れり、以降子孫を絶々とした。



佐倉城略図（主として嘉永年間の古地図により横九領彦氏作成）

以上のように佐倉藩は、後期畠田氏の入部までに実に一三回（幕領になると回数をりぞく）という領主の交代がおこなわれたのである。佐倉藩のこのような動きは、とりやなぢりて幕府の「江戸のお膝元」とに対する支配の性格をあらわすものにほかならない。

しかし、延享二年（一七四九）老中となつた畠田正亮が（正徳の末に上臈の名）が、既に平定金に配属されて以降、正徳系の畠田氏（後継畠田氏）となりて定着して、確
実にいたつた。

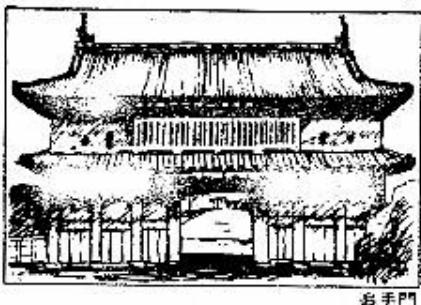
佐倉城

の御跡足 ②佐倉市 ③平山城 ④千葉刑獄 ⑤天正
年間、慶長十六年一元和三年 ⑥古墳、塚

佐倉城の歴史は新しい。しかしその前身は平井門以来の名家として、下総地方に勢力をもつっていた千葉氏の本拠であった。

室町時代には、千葉猪鼻台に本拠があつたが、千葉轉流の時代に千葉城を去り、本佐倉に移った。その後千葉氏は北条氏に服属し、千葉邦胤の時にいまの佐倉鹿島台に移して新城を築いたが、この時代には城は完成を見ずに終わっている。天正十八年（一五九〇）北条氏は豊臣秀吉のために滅ぼされたので、佐倉城も破却され、千葉氏も滅んでしまった。

やがて関東一円が徳川家康の手に帰ると、家康は土井利勝に佐倉城の復興を命じ、城は元和三年（一六一七）に完成した。土井氏十一年五万石の城である。



追手門

佐倉城と歴代城主

佐倉城は江戸城の東部
防衛の要衝として、城

主はつねに徳川家の信任の厚い諸代大名であつた。初代は家康の參謀格で大老の要職も務められた土井利勝、その他、家光の信任が厚かかつた堀田正盛とその子正信、正亮や稻葉正住、

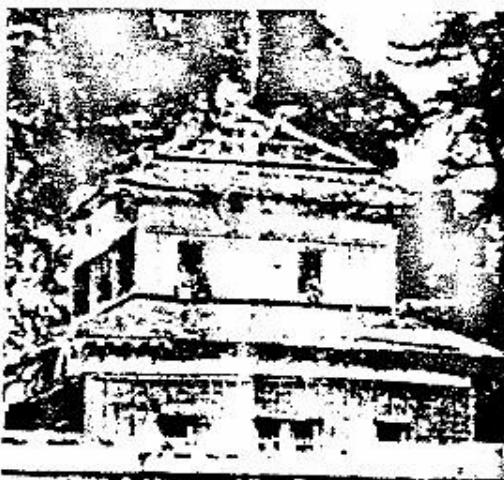
松平乗昌、堀田正睦など著名人がいる。とくに正睦は、幕末の首席老中として外交問題や改革・文化の向上にも大きく貢献した。

ある。

ある。

た。枯れた、うつろな老木。妻にびっしり寄生した苔は、老樹と命をともだちと枯れている。その姿はむしろ不死といふべきだった。

（泰山古文）



幕末の頃
古写真
鉛筆画
佐倉城

その原因は

地理的条件も

あることなどが

ら、江戸幕府

の政策が強く

働いていたこ

とにある。幕

府は、江戸と

いう根拠地を

固めるため

に、関東平野

に多くの城塞

を配備し、そ

こに居住する家臣を駐在させて衛星地帯を構成していく。その場合大抵の城郭の存在を避けたのは当然であろう。住時には、本丸と櫓門に囲まれた「御三重櫓」（天守）二の丸、三の丸が築かれ、すべて土塁と空堀で囲めてあった。現存するのは、土塁と空堀だけである。

た。枯れた、うつろな老木。妻にびっしり寄生した苔は、老樹と命をともだちと枯れている。その姿はむしろ不死といふべきだった。

ある。

ある。

佐倉城跡

(卷一)

よるものである。

この間正暦は、天保十二年から同十四年まで幕府老中職を勤め、一方「子育教諭直書」を出し、間引きの懇習除去に努力する等、領内の民政にも尽した。安政二年(一八五五)再び老中職に登り、その主座として日本の開国に奔走、元治元年(一八六四)五十五歳で没した。

市内鹿島町、佐倉警察署前下車、京成佐倉駅より徒歩五分。佐倉市街の西端、鹿島川に面した台地上に残る平山千四百石に入封した土井利勝が、翌十六年から築城工事に取りかかり、約七年間かけて元和三年(一六一七)に完成させたもの、自然の地形を巧みに利用した名城で、四層の天守閣がそびえていた。

土井氏は慶長十七年に一万二千六百石、元和元年に二万石、寛永二年(一六二五)に八万石の増封を受け計十四万五千石の大名になつたが、寛永十一年近江膳所に移り、以後城主は、寛永十二年松平家信、同十九年堀田正盛、寛文元年(一六六一)松平乗久、延宝六年(一六七八)大久保忠朝、貞享三年(一六八六)戸田忠昌、元禄十四年(一七〇一)稻葉正往、享保八年(一七二三)出羽山形から堀田正亮が十万石で入部、一二六年間伝えて明治維新に及んだ。幕末の石高は十一万石。

現在城跡は、佐倉公園とされており、鹿島川を西方眼下に眺める高台上に本丸跡、その北に一段下がつて二の丸跡、土塁・堀の一部等が遺存しており、一隅には、旧陸軍の庁舎も残つてゐる。二の丸跡の東側、佐倉中学校と佐倉東高校のあるあたりが三の丸跡で、昔は武家屋敷が建ち並んでいた所である。

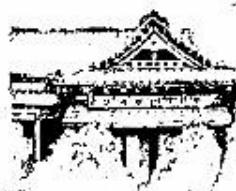
本丸跡には、国立佐倉療養所があるが、この構内にそびえる“モッコク”は、県の天然記念物に指定されている。三本のモッコクが若合つて一本の木の様になつておらず、目通り幹周二・六m、樹高十一・六m、枝張りは南四・七m。土井利勝が佐倉城を築いたときに植えたものという。

堀田氏歴代の中で良く知られているのは、“西の長洋崎、東の佐倉”、“薩摩”とまでいわれた程、佐倉藩に洋学を導入した、四代正陸である。正陸は文政八年(一八二五)十六歳で藩主となり、天保七年十月に藩校成徳書院を設立、天保九年四月に月には西淳甫を西洋学を学ばせる為江戸に派遣、さら年に同十二年、仙安・淳甫の二人は長崎に遊学、翌十三年帰郷して、成徳書院で蘭学。西洋医学の講義を始めは、江戸の名高い蘭方医佐藤泰然が佐倉に招かれたので、これも正陸の手厚い保護によるものである。江戸の名高い蘭方医佐藤泰然が佐倉に招かれたのは、江戸の名高い蘭方医佐藤泰然が佐倉に招かれたので、これも正陸の手厚い保護によるものである。

佐倉は江戸時代房総第一の城下町で、土井利勝が七年の歳月をかけて築城した佐倉城は、天然の地形を利用した名城で四層の天守閣がそびえていた。城代の竣工は一六一七年天和三年で、本丸跡に夫婦木斜壓樹老代城主の崇敬があつく、藩主堀田正愛の着用の紫裾濃



神賀多神社



旧佐倉順天堂

オランダ医学を学んだ佐藤泰然は、天保14年(1843)に佐倉に移住して、順天堂を開設し、外

科手術や神経を行なうかたわら、医学生の教育を行なった。日本近代医学教育の発祥の地である。現在、安政5年（1858）建設の住いや、明治時代の診療棟が残っている。

●佐倉宗吾

江戸時代の末から明治時代にかけて佐倉の地名を全國的に広めたのは歌舞伎（東山桜莊子）や「佐倉義民伝」である。これは佐倉藩領公津村（成田市内）の名主宗五郎が領主堀田正盛の圧政を將軍に直訴し、明暦元年（1655）に妻・子供4人とともに死刑にされたことを筋としている。最近の研究では、惣五郎という農民が処刑されたことは明らかになっているが、歌舞伎の内容そのものは、後世の創作と考えられている。成田市に宗吾蠶堂（東勝寺）がある。

胴丸（県重要文化財）の甲冑がある。

明治以後、佐倉は軍都として知られ、佐倉城跡は歩兵五十七連隊の兵營となつた。バスを佐倉小学校前で降りると甚大寺がある。一七四六年延享三年、山形城主であつた堀田正亮が、佐倉城主に移封された時、この寺も山形から移つて來た。不動明王を本尊とした天台宗の寺で、堀田正俊、正睦、正倫など堀田氏一族の墓がある。

寺の隣りの堀田正久氏宅に藩校成徳書院で使つたと
いう天球儀（県文化財）や佐倉城主の愛用した鳳凰詩
絵軸（県文化財）、家光の書いたセキレイの図、家綱
筆の御内書、堀田正俊の書状が所蔵されている。

● 伝媒「猪狩狗」

何代目の城主の頃であったろうか。ある日乳母が姫君をお守りしながら池にやって来た。この池には岸から少し離れた所に水草が青く美しくはえている。乳母はその水草を若君にとってやろうと、片手に抱いたまま、ぐっと他方の手をのばした。ところが、水草に手の届いた瞬間、あやまって若君を水中に落してしまった。幼い若君はおよげようはずがなく、そのまま沈んでしまった。

乳母は自分のあやまちを嚴様に何とお詫びしたらよいか困り果て、いっそ自分も一緒に死んでと、その場にとび込みついに帰らなかつた。以来この池に「うばこいしか」と問うと水底からぶくぶくと水泡がわき上り、青草のまわりに消えて行ったという。春から夏を盛りに水蓮が池一面に美しく咲きほころことで知られる池には、こんな悲しい伝説が秘められている。



参考
佐国郷日道千考
倉立土本罐葉図
市歴資城と県書
観史料郭岩の
光民事全付歴
資族典集太史
料博物館資料



地球儀 メルカトル ルーウマン 1511年

いま、わが国は国際的位置も高まり世界中から注目される国になった。そのため、日本の歴史や文化に対する国際的関心は近年とみにつまり、日本国内においても転換期の意識を反映してか、自国の歴史・文化への関心が深まるばかりである。

こうした時期に際し、日本の歴史・文化に対する正確な知識と情報を提供する国家的な施設を設けることは、きわめて大きな意義をもつものと思う。国立歴史民俗博物館(歴博)はこのような要望にこたえようとするもので、十数年の準備を経て昭和五六年(一九八一)四月に設置され、五八年三月、いよいよ開館の時を迎えた。

歴博は普通の博物館とはちがって、歴史学・考古学・民俗学の三部門、進んでは三者の協業を通して、日本の歴史・文化を総合的に究明しようとする研究機関である。そして、その最新の研究成果に基づいて、日本の歴史・文化の体系的な展示を公開し、国民一般に、さらに日本を訪れる海外の人々の観覧にも供するものである。

この博物館の展示には、常設の総合展示・臨時の企画展示及び館外の屋外展示などがあるが、常設の総合展示においては、日本文化にふさわしい質感や色調を基調として選ぶことにし、和紙や白壁のかもしだす「白」のイメージと「木」の物質感を共通の展示装置の基調とした。また、プロローグとエピローグは、日本の歴史・地理的条件を象徴するように「海」を基調としてデザインしてある。とくにプロローグは近世末の「日本から世界へ」「世界から日本へ」海を越えて往来した人々のスナップ写真を構成して近代への橋渡しを考えている。

歴博の総合展示場は、地上一階・地下一階の計八六〇〇平方メートルあるが、地上では前近代を扱い、そのうち第一・第二展示室では、歴史学と考古学の協力によって原始・古代・中世を、第三展示室では歴史学と民俗学の協力によって近世を展示する。また地下一階では、主として近・現代を扱い、近・現代の歴史的な展開を歴史学の立場から、近・現代の民衆生活に生きている民俗を民俗学の立場から構成し、展示するものである。

国立の歴史博物館はわが国でははじめての試みであるから、学術的に十分に裏打ちされた総合展示を完成するには、一〇年の歳月は必要とするであろう。そこで、次のような順序で逐次これを完成していくこととしている。

井上 光貞

国立歴史民俗博物館長
東京大学名誉教授

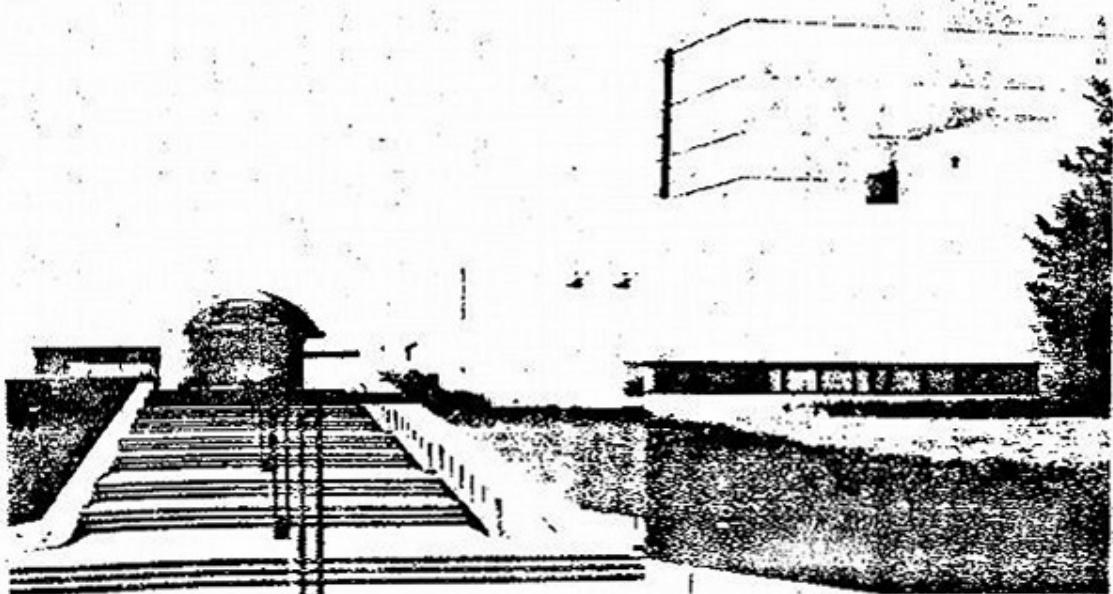
展示構想——序にかえて

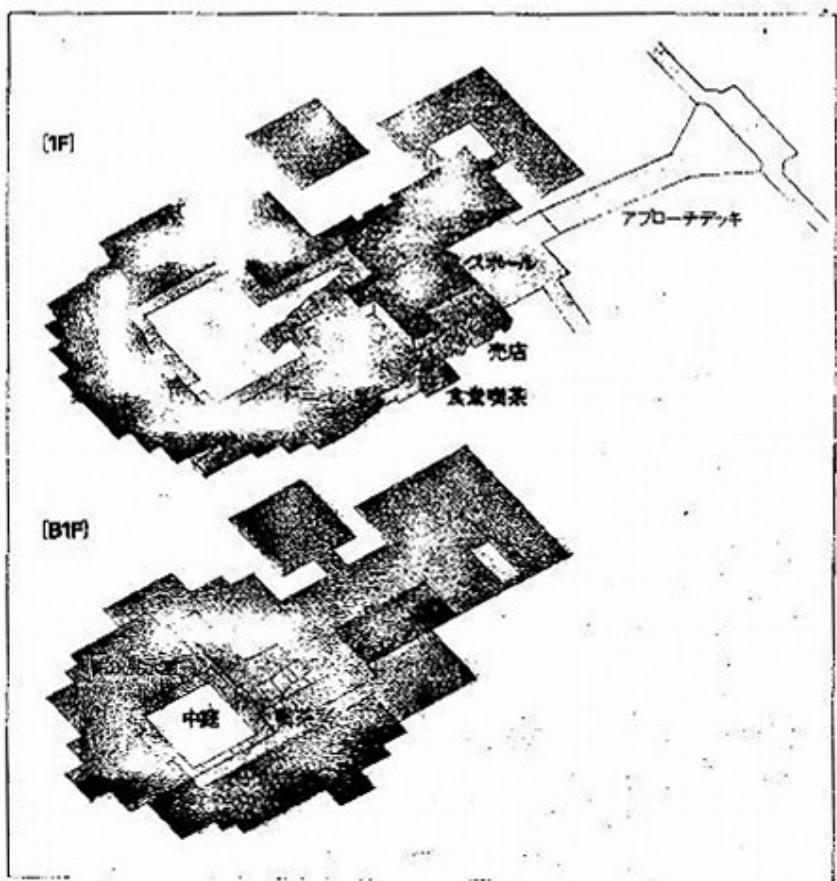
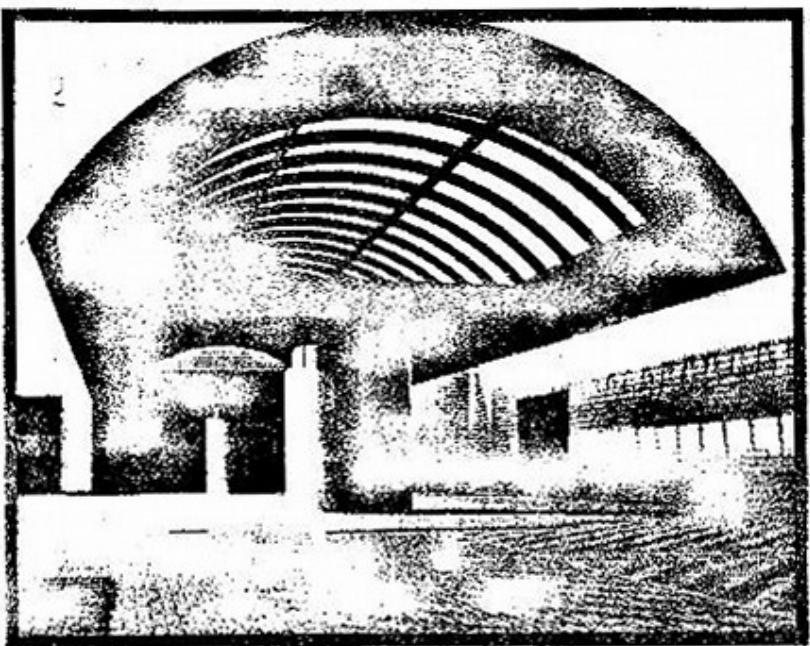
昭和五八年三月のオープン時には、原始・古代・中世を扱う第一・第二展示室の主要部分を、同年一月には近世を扱う第三展示室の主要部分を開き、昭和五九年三月には各室の未完成部分を仕上げて、地上一階の「前近代」部分を完成する予定である。続いて地下一階の近・現代にとりかかるが、大規模な民俗展示の調査や収集を充実する必要もあるので、けっこう昭和六〇年の末期に、常設展示のすべてを完成することになる。

歴博の総合展示は、時間的な系列としての歴史的展示と、空間的なひろがりによる民俗的展示とからなるが、いま準備中の後者はしばらくおき、前者において特に配慮したこと述べたい。一つは、生活の歴史に重点をおいたことである。もちろん歴史には、政治・経済・文化・思想・社会・生活など様々な部面がある。しかし博物館はもともと、「物」を展示する施設であるので、政治や思想はなしににくく、「物」で表わしやすい生活の諸相を小すのかふさわしい。しかも、日本の歴史・文化を、民衆をはじめとする社会各層の生活に重点をおいて展示することは、観覧者にとっても身近で親しみやすいものとなろう。また、そのことは歴博が研究機関として追究しようとする目標にもよく合致するものである。

整博の歴史展示においては、またよく教科書にみるような、通史的・網羅的な概説展示をやめて課題(テーマ)展示とすることになった。歴史の流れには、それぞれの時期に固有な、しかも現代からみて重要な課題が沢山にある。わたくしたちは、日本人の生活の歴史に沿いながら、しかも右の意味で重要と思われる課題をひうい、「三のテーマを選んだ。そして、整博内外の専門家四、五人ずつからなる「三の展示プロジェクトチームを作り、構想を練り、シナリオを作り、展示品をとのえて今日にいたつたものである。ただ、それぞれのテーマは、将来また、あらたな研究条件に則して再検討し、新しいものに変えていくつもりである。

展示品は原品ばかりではなく、複製品や復元模型、グラフィックパネルやビデオなどを用いて、できるだけ視覚的に内容を解説することによって、一般にわかりやすく展示するという方針をとった。観覧の方々がこの課題展示を通じて日本の歴史・文化についての理解を深め、そこの人それぞれのあらたな問題を発見して、学問的な興味を抱いていただければ幸いである。





建物と一般公開施設

施設計画設計は、芦原建築設計研究所(所長芦原義信)が行つた。

国立歴史民俗博物館の諸施設は、この生地が近世末まで諸代大名の居城であった歴史環境及び自然的環境の保持について配慮し、かつ、都市計画公園である佐倉城跡公園との調和を可能なかぎり考慮して設計されており、博物館の中心となる建物は、城跡の景観に調和させるため、敷地北部につくるとともに、地下部分を大きくして、地上部分の容積をできるかぎり押さえている。

博物館へのアプローチは、国道一九六号線から北口(敷地内の駐車場までは車も可)の他、都市計画公園内を経由する南口(公園外で下車し徒歩)も設けられている。

展示場には、アプローチ・テッキを上りつめたところにあるエントランスホールを経由して入場する。エントランスホールには、館内における受付、案内、クローケ、売店等のサービス部門が設けられている。

展示室は、日本の歴史と文化について常設で展示する第一展示室、第二展示室、第三展示室、第四展示室の各室及び特別展等を行う企画展示室とで構成され、中庭を囲んでらせん形に二層に重ねて配置されており、当面図に示す動線にそつて総合展示の原始・古代・中世までの常設展示等を観覧することになる。

展示室と総合展示のテーマ

第一展示室 展示のテーマ

日本文化のあけぼの
稻と倭人

前方後円墳の時代
律令国家

沖ノ島

第二展示室 展示のテーマ

王朝文化

東国と西国

大名と一揆

民衆の生活と文化

大航海時代のなかの日本

印刷文化

第三展示室 展示のテーマ

百姓の世界

都市の繁栄

道と旅

躍動する民衆

文書と絵図